

国立国語研究所学術情報リポジトリ

＜全文＞近代の日本語はこうしてできた：
国立国語研究所第7回NINJALフォーラム

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-03-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000923

近代の日本語は こうしてできた

「標準語」制定を求めた時代の動き 清水 康行

「新しい女」の誕生とことば 小林 千草

漢語が日本語に溶け込むとき 田中 牧郎

新しい世界のことばとしての漢字表現 齋藤 希史

近代日本語における識字とメディア 土屋 礼子

パネルディスカッション

パネリスト・清水 康行、小林 千草、田中 牧郎

齋藤 希史、土屋 礼子

司会・小木曾 智信

近代の日本語は こうしてできた

開会のあいさつ

影山 太郎(国立国語研究所所長)

1

講演 「標準語」制定を求めた時代の動き

清水 康行(日本女子大学教授)

4

講演 「新しい女」の誕生とことば

小林 千草(東海大学特任教授)

13

講演 漢語が日本語に溶け込むとき

田中 牧郎(国立国語研究所准教授)

23

講演 新しい世界のことばとしての漢字表現

齋藤 希史(東京大学教授)

39

講演 近代日本語における識字とメディア

土屋 礼子(早稲田大学教授)

48

パネルディスカッション

パネリスト… 清水 康行、小林 千草、田中 牧郎、齋藤 希史、土屋 礼子

57

司会… 小木曾 智信(国立国語研究所)

閉会のあいさつ

木部 暢子(国立国語研究所教授)

66

開会のあいさつ

影山 太郎（国立国語研究所所長）



みなさま、よくいらつしやいました。今日は、国立国語研究所の第七回目の公開フォーラムということで、「近代の日本語はこのようにしてできた」という興味深いテーマをご用意しました。今、桜が満開ですが、本日の資料の表紙も桜の花が満開の華やかな図柄になっています。これと合わせて、講演会の内容も、近代の日本語が現在の姿に開花した過程をたどるというものになっています。戦前の日本語は、現在の日本語と比べてどのような状態だったのか、明治期から昭和初期までの日本語がどのようにして現代の姿に開花したのか、というのはいっしょに簡単な話ではありません。

日本語の歴史は、標準的な時代区分で言いますと、奈良期から平安期の古代語、鎌倉期・室町期中世語、江戸期の近世語に分かれます。本日のテーマである近代の日本語、つまり近代語と言いますのは、明治期から大正期、昭和初期、つまり第二次世界大戦までの日本語とお考えください。講演の中で、近代がどこからどこまで広がるのかという議論が出てくるかも知れませんが、とりあえず、そのようにご理解ください。

さて、近代語の状態を理解していただくためには、その前提として、今私たちが使っている現代の日本語がどのようなになっているのかということを確認していただくことが重要です。以前は、「日本語は世界の中で最も難しい言語である」とか「日本語は省略が多く曖昧な言語だから外国人はとてむづかしい」といった日本語論が流布していた時期がありました。しかしながら、そのような議論の多くは、外国語をよく知らない人の主観的な思い込みではなかったでしょうか。視点を変えて、日本人の立場ではなく外国人の立場から日本語をみると、実は、日本語の文法は比較的単純です。世界の諸言語を比較する言語類型論という分野の研究によると、地球上の約六千言語の中で日本語の発音や文法は比較的やさしく単純な部類にはいるとされています。

そのことは、アメリカ生まれのロジャー・パールバスさん……この方は言語学者ではなく作家・演出家なのですが……も、最近出された『驚くべき日本語』（集英社インターナショナル、二〇一四年）という本の中で熱く語っています。「驚くべき」というのは、英語の「amazing（アメイジング）」にあたると思いますが、この言葉は単に「驚く」

だけでなく、「驚くほど素晴らしい」という褒め言葉なのです。実際、バルバスさんは、外国人にとって日本語は非常に学びやすいと褒めちぎっています。もっとも、この人が比べているのは、英語のほか、極めて複雑な語尾変化を持つポーランド語やロシア語ですから、日本語がやさしいと思えるのは当然なのですが。

ところで、もしバルバスさんがこの二十一世紀の日本ではなく、明治時代、大正時代に来日されて日本語を習得されたら、同じように言ったでしょうか。また、江戸時代、さらには鎌倉時代、平安時代に来日されていたら、「日本語はやさしい」と言えたでしょうか。おそらく「ノー」だと思います。古代語は動詞その他の活用形が非常に複雑でした。現代の日本語は、不規則な活用形が残っているものの、全体としてはかなりすっきりしています。また、昔は八母音だったという説がありますが、現在は母音、子音も非常に単純化されています。

ということ、現在私たちがなげなく使っている日本語が言葉の仕組みとしては優れているということをご理解いただいたうえで、それでは、どのようにして明治、大正の近代語が現代の言葉に花ひらいていったのかという話題に移っていきます。

その当時は、言語としての自然な変化だけではなく、政治的な力も多くはたらいていました。年配の方々はそのあたりをよくご存知だと思います。明治の初めに、国語学者の上田うえだ萬年（まんねんとも言う）（一八六七～一九三七）が、国家の言語、国家語という意味で「国語」という言葉を作り、日本政府は国語というかけ声のもとに標準語の統一、仮名遣いの統一などを図ってきました。その反面、海外の植民地に日本語を押しつけ、国内ではアイヌ語を排斥したり、各地の方言、特に沖縄の言語を弾圧したりして、さまざまな悲惨な結果を生むことにつながってしまいました。ちなみに、現在の国立国語研究所は沖縄の言葉もアイヌの言葉も専門家を置いて大切に研究していますので、どうか安心ください。

さて、近代語の時代には、一般の国民のあいだでも国語、特に漢字の多さ、難しさが日本の近代化、民主化を妨げるという意見、意識が高まってきました。そのことから、漢字の数を制限すべしという意見や、漢字仮名を廃止してローマ字で表記してはどうかといった意見が出てきました。戦後すぐにGHQの要請によって日本にきた米国教育使節団もローマ字の使用を推奨しました。

一般的に言うと、言語というものは時間によって、地域によって自然に変化していくものです。しかし、日本語の近代化にあたっては、国の力、政治的な外圧による人工的な変化が少なくありませんでした。その結果、明治期か

ら大正期、昭和初期にかけての日本語は、政府にとっても国民にとっても非常に混乱した時代でした。その混乱期において、日本語を合理的な言語として継続的に安定させるための基盤作りに寄与するという目的で作られたのが、国立国語研究所だったのです。昭和二十三（一九四八）年のことです。今日のこれからの講演は、国立国語研究所ができる前の戦前の話になります。では、最後までお楽しみください。



講演

「標準語」制定を求めた時代の動き

清水 康行（日本女子大学教授）

本フォーラムの題目である「近代の日本語」の具体的な姿に関するお話は、この後に登壇される先生方にお任せすることとして、私は、今日の露払い的な役割として、「国語」とか「標準語」とか呼ばれる近代の規範的・標準的な「日本語」が制定されていく動きと、その背景として考えられる当時の日本語をめぐる諸状況に関して、お話をさせていただきます。

全体の要旨

最初に、全体の要旨を、申しておきましょう。

まず、日本全国に通用する言語を整備しようという考えは、明治のごく早い時期から唱えられていましたが、国家の言語としての「国語」「標準語」の制定を求める動きが具体化・本格化するののは、世紀の境目頃、明治二〇年代後半以降になるという流れをお話しします。

次に、その時期に「国語」「標準語」が求められた背景には、全体的な国運の伸張と、それに伴う国家体制の整備の必要があったことに触れていきます。具体的には、教育の普及があります。初等教育がかな

りの程度普及したのに伴い、教育組織全般を見直す中で、言語教育、国語教育が問題になってきました。もう一つ、いわゆる版図拡大があります。日本の領土が広がっていき、日本語を母語としない人々が大量に日本国の国民になったため、その人々への「国語」教育の問題が出てきます。さらに、外国人が日本の中で自由に住んだり商売したりすることができるようになった内地雑居の時代を迎えたことにより、外国人との交流という問題も意識されます。

続いて、その頃に活動した国立機関である国語調査委員会が選定した「標準語」が、「東京の教育ある人々の言葉」、すなわち、地域としての「東京」、社会階層としての「教育ある人々」が用いる言語であり、それ自体はすでに常識化していた見方を、具体



清水 康行

東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了、同博士課程中退。
名古屋大学助教授等を経て、1996年より現職。
専門分野：日本語学、特に近代日本語史

的な調査によって裏付けたものであることを紹介します。

そして最後に、このような「国語」「標準語」観には、被支配者、当時の報告書では「土人」と表現されている植民地の人たちの民族言語への顧慮と尊敬が欠けているという趣旨の指摘をして、話を閉じる、という順番でお話をしていきたいと思います。

一 明治初期の「通語」志向

全国に通用する言語を整備しようとする考えは、明治の早い時期から見られます。

明治五（一八七二）年に、『学制』が公布されます。序文に当たる「学事奨励ニ関スル被仰出書」での「邑に不学の戸なく、家に不学の人なか

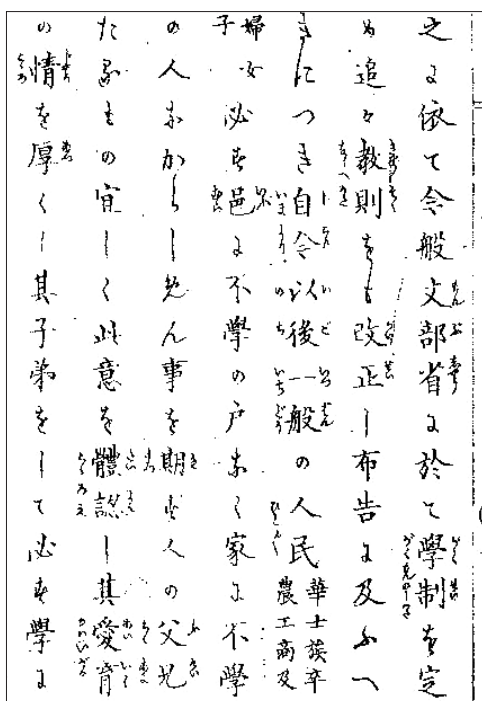


図1 「学事奨励ニ関スル被仰出書」
（国立国会図書館 蔵）

らしめん事を期す」という文言で知られている「学制」です。

（なお、図1では、「邑」の右側に「いふ（ユー）」、左に「むら」というように、漢字の左右に振り仮名がつく、両ルビというものが見られます。）

集権的な教育体制を整備し、国民皆学を目指したこの制度では、小学校科目の中に、「会話科」（「ことばづかい」と読まされています）という教科が置かれます。これを置いた狙いについて、当時の文部少丞（今でいう本省の課長クラスにあたる）西潟訥（一八三八―一九一五）が、次のように「説論」しています。

我日本ノ国タル東西僅ニ六百里「……」言語相通ゼザル、カクノ如キモノハ他ナシ。従前会話ノ学ナキガ故ナリ。方今吏務ヲ奉ズルモノ、或ハ西ヨリ東ニ赴キ、或ハ東ヨリ西ニ詣リ、事ヲ訕ヒ訟ヲ聴クニ、言語通ゼザルアレバ、情実審カニシ難ク、猶外国ニ至ルガ如シ。其不便モ亦以テ知ルベキノミ。故ニ辺陲僻遠ノ小学ニ在テハ、必十分会話ノ課ヲ授クルヲ要スベシ。「……」遂ニ正韻通語ヲ得ル

（ちなみに、この「言語相通ゼザル」の「言語」という言葉を、明治初期に「げんぎよ」と読んだのか、「ごんご」「げんご」と読んだのかは、面倒な問題です。これだけで三〇分ほどかかるのですが、ここでは、そういう話は一切抜きにします。）

余談を言えば、西潟は、もう三〇年近くも前になりますが、井上ひさしが書いたNHKのテレビドラマ『國語元年』（一九八五年放送）の主人公のモデルになったと言われている人物です。ただし、この方、ドラマの主人公のような悲惨な結末とはならず、その後も順調な人生を

送ります。

学制は明治五（一八七二）年に出来ますが、それと前後して、「廃藩置県」「徴兵令」「地租改正」が矢継ぎ早に出されています。これらの施策に共通していることは、半ば地方分権的であった江戸時代の幕藩体制を否定し、中央集権的な行政を目指す、という明治政府の志向です。学制もその中に位置づけられます。中央集権的なシステムを構築していく上で、全国の方言差が大きいという現実、中央から地方に派遣されて「吏務ヲ奉ズル」政府の役人にとって「不便」であるから、標準的な言語を教育によって普及したい、というのが、「通語」教育の大きな狙いでした。

これを受けて、「会話」科用の教科書なども、文部省自らの手によって編纂されますが、この試みは、結果として短期間で頓挫します。

それには、いくつか理由があります。まず、当時、学校教育は文章を読んだり書いたりすることであって、話し言葉の教育などは要らない、という学界・教育界の無理解があります。たとえば、後に東京帝国大学教授になる黒川真頼という人は、「小学教授書につきての論」（一八七三年）の中で、「サウデアリマス、カウデアリマスなどいふ詞は教ふるに及ばず。自然にその土にならばしありて、聞をはへ言をほゆるものなり。何ぞこれを普通に教ふべきものとせむ」と批判しています。

それに、インフラの整備不足もありました。学制では、全国を八大区（後に七大区）に分け、各大区に三二中区、各中区に二一〇小区を置き、各区に大学校、中学校、小学校を設けるという大変なシステムを計画していたのですが、実際に設立された大学は、やっと東京に一つ、それも旧幕府の諸機関の掻き集めでしたし、小学校の多くは、寺子屋

等を転用したものでした。

しかし、何よりも、ここで教えたかった肝心の「通語」の出身についての共通理解・具体像が確立していなかったことが、大きな原因でした。

（ここで、ちょっと寄り道しておきます。西潟は「東西僅二六百里」と言っています。東西

二千キロほどしかない小さい日本の国ということですが。しかし、日本は、東西南北の広がりで言うとき意外に広い。図2は同じ縮尺で日本地図をヨーロッパ地図にかぶせたものですが、我々の知っているヨーロッパの地域をカバーするくらいの広さがあります。しかも、いくつもの島に分かれていて、島のなかに山や川やありますので、もつと多様な言語になっていても不思議ではありません。むしろ、そのほうが自然でないか、とさえ思えます。そうならないのは、日本語が日本列島で使われるようになったのがそんなに古くないからではないかと考えている学者もいるくらいです。）

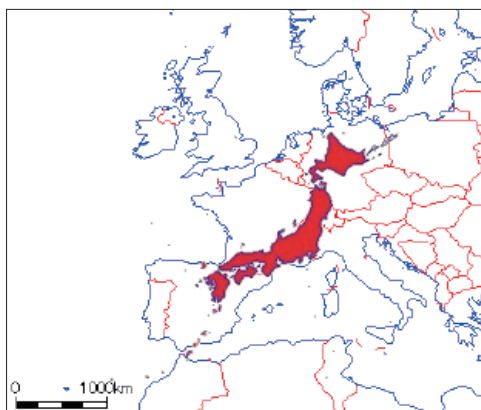


図2 日本とヨーロッパの広さの比較

二 「国語」「標準語」制定への具体的な動き

さて、世紀の境目近く、明治二〇年代後半以降になると、国家の言語としての「国語」「標準語」の制定を求める動きが本格化します。その旗振り役が、上田^{うえだ}万年^{かずとし}です。ただし、本人はローマ字でMannenと署名していますので、「まんねん」と呼んだほうがよいのかも知れませんが、彼が明治二七（一八九四）年に行った演説「国語と国家と」で、

世間すべての人は、華族を見て帝室の藩屏たることを知る。しかも日本語が帝室の忠臣、国民の慈母たる事にいたりては、知る者却りて稀なり。「……」或はいはん、国語に対する手入れば充分なされ居らずやと、予はこの答に向ひて否との早答を与ふる「……」国家のなすべき所を實行し、其尊嚴を維持すべきは、国家の義務なればなり。

と、主張をします。

上田は、帝大を卒業後、明治二四（二七）（一八九一）（一九四）年、当時の言語学研究の中心であったドイツとフランスに留学し、帰国後すぐに帝大教授となります。彼は、「国語と国家と」に続けて、「国語研究



図3 上：30歳頃の上田万年、下：『国語のため』扉（国立国会図書館 蔵）

に就きて」「標準語に就きて」を次々に発表し、それらを『国語のため』という本にまとめております。東京帝国大学に国語研究室を創設して国語の研究教育指導に当たるとともに、文部省の専門学務局長を兼任します。さらに、後にできる国語調査委員会の主事かつ主査委員にも就任し、国語に関する研究と施策とを主導する存在になります。

図3上は、三〇歳そこそこの上田の肖像写真です。図3下は、『国語のため』の扉です（「国語は帝室の藩屏なり」の「藩屏」は、「囲い」「守り」という意味です）。

この頃、一般にも、「国語改良」「国語統一」といった考えが打ち出され、国会建議（議院から政府に対しての要望）もなされていきます。その一つ、加藤弘之（一八三六—一九一六）らが提案した「国字国語国文ノ改良ニ関スル建議」（明治三三（一九〇〇）年 貴族院で修正可決）では、日本語での文字と語彙と文章とがめちゃくちゃであるので、学童児童はこの言語文字の学習のために学校生涯の大半を無駄遣いしてしまう。これでは世界での競争についていけないので、「国字国語国文ノ改良」は国家の事業として重要である。だから、政府はそれをやりなさい、と述べています。

これを受けて、「文部大臣ノ監督ニ属シ国語ニ関スル事項ヲ調査」するための専門機関である「国語調査委員会」が発足します。明治三五（一九〇二）年三月のことです。委員長は、さきほどの改良建議を出した加藤弘之。長く東大総長を務めた人物です。委員の中には、嘉納治五郎（一八六〇—一九三八）がいて、こういうときは文化人が選ばれるのかと思われましようが、彼は、講道館柔道と並んで、学校教育、特に英語教育にも尽力し、当時は東京高等師範の校長を務めてい



図4 国語調査委員会の面々（国立国語研究所HPより）

ました。さらに、哲学者の井上哲次郎（一八五六～一九四四）、上田の盟友であった文部官僚の澤柳政太郎（一八六五～一九二七）らが当初委員で、上田も、事務を束ねる主事と研究上のトップである主査委員を兼ねて入っています。国語辞書『言海』で有名な大槻文彦（一八四七～一九二八）が、上田と並んで主査になっています。後に、芳賀矢一（一八六七～一九二七）、金沢庄三郎（一八七二～一九六七）、藤岡勝二（一八七二～一九三五）らが加わります。

図4は、国語研究所のホームページから引いたものですが、中央に座るのが大槻、その向かって右隣で頬杖をついているのが上田です。上田の隣には後に『広辞苑』で知られることとなる新村出（一八七六～

一九六七）、右端には長く国語施策に関わっていく保科孝一（一八七二～一九五五）が座っています。新村も保科も上田の教え子で、新村は未だ二〇代後半、保科は三〇代になったばかりの頃でしょう。

三 「国語」「標準語」 制定の背景

こうして「国語」「標準語」制定への動きが強まる世紀の境目の頃は、全体的な国運の

伸張と国家体制の整備の時期でもあり、それが、新たな「国語」「標準語」を求める時代的な背景ともなりました。具体的には、次のような事情があります。

まず、教育の普及による教育組織全般の見直しということがあります。図5は就学率の推移を表しています。日本の正確な人口は、国勢調査が行われる一九二〇年以降でないといわならず、それ以前はある種のつかみ勘定ですから、何パーセントといってもどこまで信用できるか問題ですが、学制が行われて当分のあいだは、就学率は五〇パーセント未満で推移します。当時の世界としてはかなり高い就学率ですが、国民皆学にはほど遠い状態でした。しかし、一八九〇年代、すなわち明治二〇年代半ばから急速に伸び、九〇パーセント台に迫っていきます。

国民皆学の実現をにらんで、明治三三（一九〇〇）年、小学校の基本法規である『小学校令』が改定されます。それに伴う『小学校令施行規則』では、それまで「読み方」とか「綴り方」とかに分かれていた諸科目が、「国語」科という名称で初めて統一されます。この『施行規則』

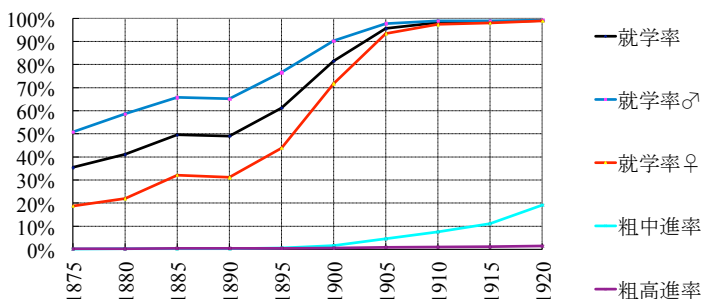


図5 小学校就学率の推移

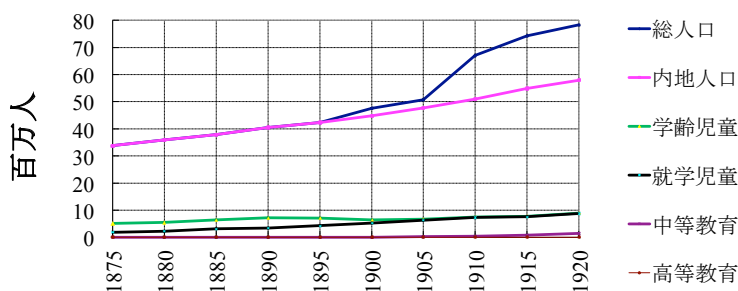


図6 人口・就学者数の推移

では、小学校で教えるべき漢字の制限、字音仮名遣（漢語に関する仮名遣）での表音式仮名遣の採用、仮名字体の一本化（変体仮名の廃止）という、国語教育・国語施策史上、きわめて重要で画期的な方針も示されます。

さらに、四年後の明治三七（一九〇四）年からは、それまでの検定教科書に代わり、文部省が自ら編纂した『尋常小学読本』を全国の小学校で一律に使うようになります。

この国定読本で用いられる語彙・語法は、その後の「国語」「標準語」に決定的な影響を与えていくこととなるのは言うまでもありません。

もう一つ、版図拡大によって、日本語を母語としない多くの人々が日本国民となり、彼らに対する「国語」教育の必要が増したことがあります。図6のグラフで、「内地人口」と「総人口」の差にあたる部分が、版図拡大により、新たな日本国民になった台湾・朝鮮の人々の数に、ほぼ相当します。これらの人々は、日本語ではない言語を、自分の母語として持っていた人々たちです。

明治二八（一八九五）年、日清戦争の結果、台湾が日本領になり

ます。すぐに国語教育が重要な課題とされ、日本語を勉強するための日本語伝習所（後に国語伝習所）が設立されます。少し後の大正八（一九一九）年に発布された『台湾公学校令』でも、「徳教ヲ施シ実学ヲ授ケ、以テ国民的性格ヲ養成シ、同時ニ国語ニ精通セシム」ことを、教育の目標としています。

また、日清戦争・日露戦争を経て、朝鮮半島への影響力を強め、遂には、明治四三（一九一〇）年、日韓併合が行われます。初代・朝鮮総督の寺内正毅による「諭告」（一九一一年）では、「国語ノ普及奨励ハ朝鮮教育令ノ眼目」だとされています。

さらには、少し後となりますが、第一次世界大戦後の大正一一（一九二二）年以降、南洋諸島を委任統治するようになります。

もう一つ、現在ではあまりピンとこないかもしれませんが、内地雑居の問題も、当時の人々には深刻に受け止められていました。いわゆる「開国」後も、徳川幕府は外国人に対する居留制限を続け、明治政府もそれを継承していました。ところが、治外法権の撤廃と引き換えに内地雑居を認める『日英通商航海条約』が締結され（一八九四年）、五年後の明治三二（一八九九）年に発効すると同時に、外国人が日本国内で自由に居住・旅行することが制度的に可能となりました。これによって活発化される外国人との交流において、どのような言語を用いるか、ということも、この時期の無視できない課題となっていたのです。

またも上田が登場させれば、彼は、「内地雑居後に於ける語学問題」（一九〇〇年）という論文の中で、面白いことを言っています。一日も早く東京語を標準語とせよ、との主張を繰り返すのと同時に、「国語

を重んずると共に外国語を奨励すべき」という議論も行っています。日本人は外国語をもっと勉強しなさいということです。

四 国語調査委員会が示した「標準」

さて、明治三五（一九〇二）年四月に発足した国語調査委員会は、早くも同年七月初めには「国語調査委員会決議事項」を発表し、「文字ハ音韻文字（フォノグラム）ヲ採用スルコト、シ仮名羅馬字等ノ得失ヲ調査スルコト／文章ハ言文一致体ヲ採用スルコト、トシ是ニ関スル調査ヲ為スコト／国語ノ音韻組織ヲ調査スルコト／方言ヲ調査シテ標準語ヲ選定スルコト」の四件を、「向後調査スベキ主要ナル事業」だと宣言します。

（これに続けて、「普通教育ニ於ケル目下ノ急」に応ずるため、「漢字節減／現行普通文體ノ整理／書簡文其他日常慣用スル特殊ノ文體／國語仮名遣／字音仮名遣／外国語ノ写シ方」についても、別に調査すると付け加えています。）

音韻文字の採用（すなわち漢字の廃止）といい、言文一致体の採用（漢文訓読調や候文を捨てる）といい、国語国字問題の根幹に関わる革新的な基本方針を、活動開始早々に決定できたのは、この委員会が初めからそうした考えを持つ人々を中心に組織されていたからだと考えられます。事実、委員長となった加藤弘之は「国字国語国文ノ改良」建議の発議者でしたし、主事・主査委員の上田万年、主査委員の大槻文彦をはじめ、委員の多くが国語改良論者でした。

国語調査委員会は、基本方針に掲げた通り、日本語の音韻組織や方

言を調査することを通して、標準語を選定することを主目標に、世界的に見ても先駆的な全国方言調査を展開します。加えて、日本語の歴史に関する記述的な調査も推進し、その後の日本語研究にも大きな影響を与えました。

しかし、一〇年ほど活動した後の大正二（一九一三）年、行政整理のあおりを受け、廃止されてしまいます。そのため、先の四つの目標を完遂することはできませんでした。廃止後に出された『口語法』『口語法別記』（大正五、六（一九一六、一七）年）が、結果として、この委員会が「標準語」をどうとらえていたのかを示す最終報告となりました。

『口語法』冒頭の「例言」には、「主トシテ今日東京ニ於テ専ラ教育アル人々ノ間ニ行ハル、口語ヲ標準トシテ案定シ」とあり、「東京」という地域の、「教育ある人々」という社会階層の言葉を「標準」とする立場が明記されています。

その参考資料として書かれた『別記』の「端書」では、もっと露骨な表現がなされています。全国各地の方言のうち、「辺鄙の方言わ、採ることわ出来ぬから、東京方言か京都方言かにせねばならぬ」、候補は最初から東京か京都だけだとした上で、「東京わ、今わ、皇居もあり、政府もある所で、全国中の者が、追々、東京言葉を真似てつかうようになつて来て居るから、東京言葉を、日本国中の口語の目当とするがあたりまえのこと」だと述べています。当たり前のことだったなら何を今さらと思うのですが、この背景には、まだ京都の言葉のほうがよい言葉だという意識が、委員自身や国民の中に残っていて、それとあえて東京の言葉とぶつけていくことによって、東京の言葉を勝利させようという狙いがありました。さらに、「東京言葉と云つても、賤しい者

にわ、訛が多いから、それわ採られぬ」と続きます。

(図7)を見てお気づきかと思われませんが、助詞の「〇〇」は「わ」と書いています。これが、国語調査委員会がやりたかった仮名遣です。より表音的な仮名遣として、こういうものを本当はやりたかったので、それで書いているわけです。

東京の言葉を標準語の基準とする考え方は、国語調査委員会独自のものではなく、すでに標準語論者が多く採っていた立場です。上田万年の「標準語に就きて」(一八九五年)でも、「東京語が他日其名譽を享有すべき資格を供ふる」と言っています。また、第一期の『尋常小学読本編纂趣意書』には、「用語ハ主トシテ東京ノ中流社会ニ行ハルモノ

分らぬようになつた。それであるから、我が國言葉にわ、文語にわ、一つに定まつたものがあるが、口語わ、全國どこも方言であつて東京の言葉わ、東京の方言で、京都の言葉わ、京都の方言で、其外國々、皆方言をつかう。そこで、全國同じに通ずる口語を立て、規則を定めねばならぬ。扱口語の目當とするものを何と定めようか、邊鄙の方言を採ることわ出来ぬから、東京方言か京都方言かにせねばならぬ。東京わ、今わ、皇居もあり政府もある所で、全國中の者が追々、東京言葉を異似てつかうようになって居るから、東京言葉を、日本國中の口語の目當とするがあたりまえのこと、と思う。しかしながら、東京言葉と云つても、賤しい者にわ、訛が多いから、それは採られぬ。そこで、東京の教育ある人の言葉を目當と立て、そうして、其外でも、全國中に廣く行われて居るものをも酌み取つて規則をきめた。かようにして出来たのが本書の口語法である。臺灣朝鮮が、御國の内に入つて其土人を御國の人に化するようにするにわ、御國の口語を教え込むのが第一である。それに就いても口語に、一定の規則が立つて居らねばならぬ。口語法わ、實に、今の世に、必用なものである。

図7 『口語法別記』端書(国立国会図書館 蔵)

ヲ取り、カクテ國語ノ標準ヲ知ラシメ、其統一ヲ図ルヲ」とあります。また、明治四四(一九一二年)に出た第二期の趣意書でも、「口語ハ略東京語ヲ以テ標準語トセリ」とされています。国語調査委員会『口語法』『口語法別記』の独創的な価値は、そうした既に常識化していた標準語観や提示される語法自体ではなく、それらをより説得的にするため、全国の具体的な方言を実際に調査して、このような東西対立の分布があるとか、古い文献を実際に調査をして、この言い方は歴史的な背景があることを明らかにしていたところにあります。

なお、国語調査委員会が示した国語改良への志向は、その後も、臨時国語調査会(大正一〇(一九二一年)発足)や国語審議会(昭和九(一九三四)年発足)に受け継がれていきます。そして、第二次世界大戦後の昭和二二(一九四六年)年の国語審議会の答申を受けての内閣告示「当用漢字」「現代かなづかい」につながっていきます。新字・新かなは、戦後、唐突に考え出されたわけではありません。

五 「国語」「標準語」に欠落した視点

最後に、これまでの議論とはいささか異なる視点から指摘をしておきたいと思います。

明治維新以降の近代日本の歴史は、日本語以外の民族言語を持つ人々と彼らの暮らす地域とを、日本の中に組み入れていく歴史でした。それは同時に、彼らの民族語を否定して、「国語」による教化が展開されていった歴史でもありました。

北の蝦夷地は、明治維新の直後に北海道と名付けられ、そこに住ん

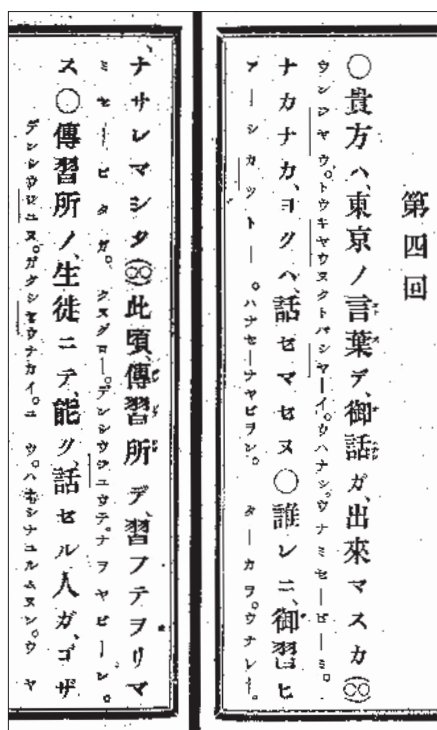


図8 『沖縄対話』(国立国会図書館 蔵)

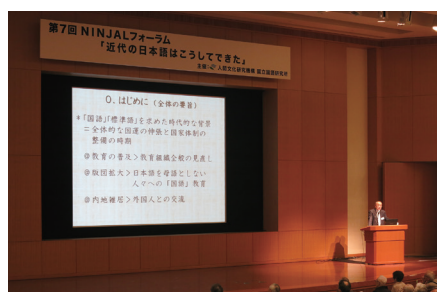
でいたアイヌの人々から先住民族は「旧土人」とされ、保護政策の対象となりました。しかし、その子弟には「国語」による学校教育が授けられ、彼らの民族言語が教室で用いられることはありませんでした。また、南の琉球は、一連の琉球処分の結果、琉球王朝が廃され、沖縄県とされます。そこでは、他の地域に先んじて、「東京の言葉」による言語教育が試みられ(『沖縄対話』、明治一三(一八八〇)年。図8)、その後、「方言札」に象徴されるような、方言否定を伴う強力な標準語教育が展開されます。そして、すでに触れた通り、台湾・朝鮮でも、「国語」化が推進されます(ただし、教育現場等での、現地言語に対する施策には揺れがあり、それらが部分的に認められる時期もあります)。

先に取り上げた『口語法別記』端書は、以下のような文言で、しめくくられています。

「台湾朝鮮が、御国の内に入つて、其土人を御国の人化するようにするにわ、御国の口語を教え込むのが一番である。それに就いても口語に、一定の規則が立つて居らねばならぬ。口語法わ、実に、今の世に、必用なものである」。

ここには、被支配者(「土人」)達の民族言語に対する顧慮と尊敬の念が欠落していることを忘れてはならないでしょう。

これを擁護して言えば、現在の我々が研究費を取ろうと思うと「グローバル化の今日こそ、日本語の歴史を研究するのが大事だ」なんて、わけのわからないこと書いたりするのと同じような側面があったかもしれない。しかし、これを記した大抵は、他のところでも同様なことを書いていますので、やや本気でこんなことを考えていたと言わざるをえません。そのことが、今日に至るまで、ある種の問題を積み残していることを指摘して、私のお話はここまでとさせていただきます。



講演

「新しい女」の誕生とことば

小林 千草（東海大学特任教授）

はじめに

清水先生のお話が非常にすっきりとみなさまの頭にはいつていったところで申し訳ございませんが、幕末にまで頭を戻していただきます。維新後の東京市の市民のことばと、それに先んずる江戸の活気がある町方、町人たちのことばからはいつていききたいと思います。

日本語の歴史をながめると、当たり前のことですが、ことばは時代を創り、また、時代がことばを創っております。どの時代をとっても日本語が大きく変化したときは、歴史が動いております。

今回のテーマになっております近代日本語の場合は、社会体制上、女性が初めて注目されてきたのが明治だから「新しい女」（新しい男）と言われないのは男はずっと中心を占めてきたから）と言われるのでしょうが、明治近代国家を支える男性たる主人公を描いている夏目漱石の『三四郎』（一九〇八年）の三四郎、『明暗』（一九一六年）の津田と互角に対峙する（会話を繰り広げる・コミュニケーションする）ヒロインの美禰子やお延を「新しい女」とみなし、彼女たちのことばづかい（物言い）がいかにして手に入れたものか、文末の「〜だわ」「〜で

すわ」の「わ」に焦点を絞って、日本語の歴史という立場で検証しようと思います。

ここでいう「わ」は、今のアニメや吹き替えで、どこの国の人でも女性が出てきた会話文末に「わ」が使われている、つまりこの人が女性だと教えてくれているマーカーのような「わ」ではありません。すでにマーカーと化した文末の「わ」をご覧になったフェミニズム論の方々は、男性が創った女性像に合うことばを使わされていると、スパッと論じられました。しかし、日本語の歴史を、まさに現場の警察官の聞き込み同様、いろいろと資料を調べておりますと、女性が「わ」を獲得するまでは大変なのです。ようやく獲得したことばを、美禰子やお延は使っているのです。その当時、非常に斬新だったわけですね。たし

小林 千草

東京教育大学大学院文学研究科修士課程修了。博士（文学）。新村出賞受賞。
東海大学教授を経て、2012年より現職。
表現論の実践として、千草子のペンネームで作家活動も行う。
専門分野：日本語学（中世を基盤とする日本語の歴史・女ことば・表現論）



かに、男の人も、新しい女性で「わ」を使っではっきり自分の物言いができるのを「素敵だなあ」と思った、素敵だと思ってくれたから、どんな使うし、その下の若い方々も真似ていきました。若い方は現代の若者、若いお嬢さんたちと同じです。「いやだわ、よくってよ」など、「わ」を他の表現と組み合わせ、当時の年配の男性方に「なんということばづかいだ」と言われるようなことも創っていきます。そのほとんど使用の広がる一歩手前の「わ」について、今日お話ししたいと思います。その試みのなかで、「近代の日本語はこうしてできた」という多面性を持つタイトルの一面について、結果論ではなくプロセスを描き出すことができればと考えています。

一 江戸後期～幕末期の女ことば その一…『浮世風呂』より

明治期の新しい女に直接つながるのは、江戸市民でも知識層であろうという中で見ていきます。当時はテープレコーダー、ビデオがありませんので、できるだけ会話を忠実に復元していると思われる『浮世風呂』（一八〇九～一三年）から拾っていきます。『浮世風呂』で、かも子さんとけり子さんのように『万葉集』を読むようなちよっと知識が高い方々は次のように話しています。

けり子「ハイ、見ました。中々手際な事でござります。しかし疑わしい事は、あの頃にはまだひらけぬ古言などが今の如ひらけて、つかひざまに誤のない所を見ましては、校合者の添削なども少しは有たかと存ぜられますよ」

かも子「何にいたせ、女子であの位な文者は珍らしいござります。先日も外で消息文を見ましたが、いにしへぶりのかきざまは、手に入った物でござります」

けり子「さようでござります。何ぞ著述があつたでござりましょうネ」（三編下）

「ますよ」が使われています。また、「ござります」は江戸的です。そして、終助詞「よ」「ネ」など持ちかけのことばが目立ちますが、「わ」は使われておりません。もう少し、なんと言うんでしょうか、けり子・かも子より知的会話を抜くと、中流階級の日常会話として次のようなものが耳にはいります。

▲「さようさ。今年之余寒が強うございまして、あのまア雪を御覧じましな」

●「さようでございます。雪の所為かして兎角病人が多うございますよ」

▲「さやうさ。いつも寒明にはちつとづ、病ひ勝でございます。シタガおまへさんはいつも御丈夫でようございます」

●「イエモウ、是でも病身でございますがネ、（略）至極達者になりました」



▲「ハイ、それはお仕合せでございます。あの延寿丹は（略）名高い薬でございますのさ。あれは一目でございましたっけ。私も暑寒にはたべますのさ」（三編上）

ここで▲は、六十ちかきばあさま、●は、それより年下の品の良い奥様です。

六十が「ばあさま」だったら私は何になるのだろうと思いますが、六十ちかきばあさまと、それより年下の品の良い奥様の会話です。

江戸ことばとして、男女とも特徴的な「さ」を用いているのが目立ちます。明治、大正、昭和もその使用が耳に立つくらいすごかった。それで、「さ」を取り除こうという小・中学校教育活動（ネ・サ・ヨ運動）がなされたくらいです。

「ます」「ございます」の敬語をふんだんに使っているのは、けり子・かも子と同じです（ただし、けり子・かも子は、さらに古風で重々しい「ござります」を使っている）。では「わ」はどこに隠れているのか、同じお風呂に来ていろいろな階層の女たちを見つめる必要があります。

さらに登場人物の幅を広げて、やっと主人のお許しをもらってお風呂に来てリラックスしている人々の会話を見ていきましょう。

おべか「お猿どん、今のをきいたか」

おさる「ウウ、聞たは」

「は」が出てきています。しかしこれは、明治期のお嬢様が使う「わ」ではなく、吐き捨てるような「は」です。でも、これこそ元の「わ」です。中世からの「わ」なんです。今も大阪では続けられています。京都でも若干耳にしますが中世以来続けられていた語気の強い吐き捨てるような「わ」です。「俺しらんワ」「うち知らんワ」など言う

「わ」です。

おべか「よくしゃべる婆さんだの」

おさる「さうさ婆はあたりめへだが、金溜屋のおかみさんよ。人品の能風をしてとんだ目口乾だの。遊ばせ^{あそ}の、入らっしゃいのと、たべつけねへ言語^{あそ}をしてもお里がしれらア。……」

ここで「遊ばせ^{あそ}」というのは「なにに遊ばせ」「ごめん遊ばせ」です。明治になって上流家庭の女性たちに使われる「遊ばせ^{あそ}ことば」の「遊ばせ」です。「入らっしゃい」「いらっしゃいまし」、今「いらっしゃい」はまだ使っておりますが、そういうことばです。そして、「たべつけねへ言語^{あそ}をしてもお里がしれらア。あれだから奉公人が居着ねへはな」では、「はな」（ワナ）というかたちで「な」と合体して出てきております。

おさる「マア、ためしてみな、去年まで居たお三どんは、六十四文ばかり置いて来た人だから久しく辛抱もしたらうが、あの跡で幾人出たとおもふ。たつた十月ばかりの間に丁度五人かはったぜ」

おべか「どうせ又、あてやいの氣にいらうとすれば直さま労咳だ」

おさる「しれた事さ。（略）氣散じに暮す方が徳さ。針を持つと持めへとこつちの量見づくだ。縫物が出来ねへて打遣られた女もねへもんだはな」（三編上）

「はな」（ワナ）が出てきています。吐き捨てるような「は」と、それからちよつと持ちかけるような「な」が合体したのが見つけれました。「ウウ、聞いたは」の「は」は、驚いたり、憤慨したりするときに下降調で発される強い語気を持ったもので、これは中世から男女区別なく認められる表現です。「居着ねへはな」「ねへもんだはな」の「はな」

(発音としては「ワナ」)は、自分の判断を相手に持ちかける気持ちを出すために「な」を添えたもので、完全に吐き捨てるような調子ではありえません。ここでは少し変貌していますね。「な」がつけられた。

男女共用の「居着けねへぜ」「ねへもんだぜ」の「ぜ」よりも、やわらかさがあります。「ます」「ございます」の敬語を使わず、活用語の言い切りや「だ」をそのまま使う下働きの若い彼女たちにとっても、「は」と言うのは、やはり強すぎるので、「ワナ」でやわらかさを出していたらしく、「その方がさっぱりとして能はな」「二朱と六百いくら足したはな」というのは、相手への歩み寄りを表しております。

中世の「は」「わ」がさまざまなバリエーションを江戸時代に起こして、「ワイ」「ワノ」「ワナ」「ワイナ」「ワイノ」になります。特に「ワイナ」「ワイノ」の歴史は古く、近世前期の近松浄瑠璃作品の女ことば、作品上、遊女が多く、花魁にも認められますから、そういうことばをことさらに口真似する以外は、江戸の女たちは使わないわけです。まして、「ワイナ」や「ワイノ」がそうになっているならば、明治の新しい女々になろうとする女たちは、一旦遊女のことばづかいとして強く染め上ったことばを避けて、しかし、「わ」の持つ自己主張性を生かそうと、「わ」を再生させることにしました。付加されていた「ナ」「イナ」「ノ」「イノ」をとってことばを創っていいこうとすると考えられます。

二 江戸後期～幕末期の女ことば その二：『春色梅児譽美』より

『浮世風呂』から二〇年後の作品で、当時の言語世界を見てみます。

『春色梅児譽美』(一八三三～三三年刊行)は、為永春水(一七九〇～一八四四)の作です。ただし、これは遊里の世界です。幕末から明治期まで、遊里の世界の資料が多く、普通のお嬢さん方の資料がないのが致命的ですが、ここに一つの言語事実があるという立場をこれからとっていきます。

この作品は昔の吉原ではなく、深川の新吉原です。深川周辺の花魁此糸さんとお長さんです。お長さんは置屋の娘で、多少遊里に足を突っ込んでいますが、町屋のお嬢さんと似た性格を持っております。今は自分の生家が没落して、身につけたお稽古事の娘浄瑠璃(義太夫)なんかで身を立てております。この身を立てる——自立する女であることも、ちよつと頭にとめておきたいと思います。一方の此糸さんは「はネ」「ワネ」という言葉を使っています。

此「ナニサお案事でない。どふかして法をかいて爰を身拔をさせもふす、手段もまたありませうはネ。かならず(略)用を足なんしヨ。(略)往なんしヨ。かならず案事なんすなエ」此「しげりやなんだ其口は。お長さん早く下へ往なんしヨ。何もこわいことはおさんせんはネ」

(初編二)

その「はネ」が、この時代、おべかさんたちの「わな」と同じように使われていると同時に、このセリフのあいだにはいった、

長「ハイおありがたふ夫じやア下に往ますヨ」

の「よ」を使った一言がとても注目されます。此糸さんとお長さんが二階で話していたので、下の階段を上がってきた遊里の世界の女の子——禿が、

「ヲやお長さん今下の方でたいそふ呼でいますヨ。はやく裏梯子から



下りてお出なまし」

と声をかけますが、この「なまし」は、遊里ことばです。つづいて、禿は、

「アノ意地悪根性がおそろしい顔をしておまはんを呼ますは。顔が憎いヨ」

と言います。ここで、「呼びますは」と言っていますが、今、私が言った「は」は、現代の「わ」に近づけて、ちょっと音を上げたかもしれません。けっして吐き捨てるような「は」ではありません。なぜなら、「ます」がついています。「ます」と言ったとき、「は」って、吐き捨てるように言えませんか、どうしてもやわらかいトーンがついたと思います。このトーン（音調・抑揚）が、のちのち明治にはいつて美禰子さんやお延さんが使う「わ」になっていく。このあと三〇年ほどのあいだに高めにやさしげに発されるトーンになっていくのだと思います。ただし、その音声資料は残されてないのが残念です。

他にも例がございます。俠氣の女髪結い小梅のお由さんはもと遊女です。やっぱり遊女が

絡んできますが、この人は、おあ姉さん、みたにキップ気風がよいのです。自立して髪結いとして働いています。その人が、愛し慕い続けた籐兵衛さんに、

由「そふやさしく被仰

と真に嬉しく思ひますけれど、どふもおまへさん方に限らず、男子達といふものは浮薄うわきなものだから、いとおもひがますやうなことが、この末ともに有ふかと案じられますは」（三篇九）

と、やはり「ます」をともなった「は」を使っています。私は、「わ」って言いましたが、私の言う「わ」より、もう少し固い部分があったかもしれない。愛する人に対して、自分の心を切々と訴えつつ丁寧の「ます」を使っています。禿より年長で、髪結いという自立した江戸の職業婦人の使用した過渡期の「わ」として記憶にとどめたいと思います。

三 明治前期の女ことば

『当世書生気質』『辰巳巷談』より

明治期にはいり、坪内逍遙著『当世書生気質』とうせいしよせいしかたぎ（一八八五～八六年）と泉鏡花著『辰巳巷談』（一八九八年）からお話しします。

『当世書生気質』の例も遊里の女性絡みで、資料的には偏るようであるのですが、当時、家が没落し女性が自分の身を立てようと思うと、芸子さんになるとか、遊里に近い所で稼がざるをえなかったという社会的事情を私は考えていかなければならないと思います。そういう世界で、元はいいところのお嬢様が苦勞して自活して自分の意思を、混乱する明治の社会で自分の考えを主張するときに、明治新政府の長州や薩摩、あるいは山形から来た官吏の方々と出会われ、そこに恋が生じると正式な奥様として家にはいり、そこが明治の新しいお嬢様方のご家庭になっていきました。これはドラマ（物語）ではなく、現実に実

数も多かったと思います。『当世書生気質』の明治一八年第一回における数寄屋橋か新橋あたりの芸妓田の次と、姉さん格の園の会話を見てみます。

園「ヘン、いやに老こんだナ。田の次はどうだ」

田の次「姉さんがやらなけりやア、妾だつて否ですワ。男三人に女一人では、どうせ叶やアしませんもの」

あらぬ想像はなさらないでください。同席するその三人の客は、銀行頭取風（四三、四歳）、銀行役員風（三五、六歳）、青年弁護士（二六、七歳）であり、上客相手の芸妓です。そうそうたる当時の社会を担う人々に対して言っています。ですから、田の次さんの「ワ」は、『三四郎』のヒロイン美禰子さんのと同じではないかと思えます。

そういう時代にあっても、田の次さんと同じような年代でもう少し遊里に近い方だと、「ワナ」と同時に「ワ」を使っています。その例が、次の新造お秀と娼妓顔鳥の会話です。

秀「モシおいらん。吉さんがけへるけへるとおいひなすッて、しやうがありませんヨ。」

顔「よいヨ、お帰りなさるならお帰し申すがい、わナ。あれほど訳をいつても不解で、お腹をおたちなさるんだから仕方ないワ。」（第七回）

江戸風な「わナ」が出てきます。こうなると、私が「ワ」ってちょっとやわらかみをつけて今読んだものよりも、ぶつさらばうだったかも知れません。なにぶん録音資料がないので……。 「わナ」と「ワ」が同居している例です。そのような状況になりました。

もう一つの『辰巳巷談』（明治三二（一八九八）年）は、洲崎の遊女胡

蝶の悲劇を扱うとても面白い小説ですが、胡蝶さんは、「鼎さんが、ぶたれるんだわ、私や何うしよう」「だッて、逢いたいわ!」と、言っておりま。このように、「だ」とか、言い切りの「たい」について、「です」「ます」にはついていませんが、これは、吐き捨てるような「わ」ではなく、相手に、ほんとに訴えたい「わ」になっていると思います。

今、「わ」を一つとって見てきましたが、資料の偏りがあると言われるれば、これ以上進めませんが、でも当時、男性と伍して女性がことばを言えた（コミュニケーション出来た）のは、遊里の世界と、遊里の世界の周辺です。ですから、私はむしろ居直って、ここに女性の主張する場があるので、会話文として反映されていると逆に言いたいわけです。

さきほどから自立するという語を使っていますが、髪結いさんも自立しています。田の次さんも家が没落して、後に主人公と結婚していくのですが、芸妓さん見習いみたいなことをしながら自立しようとしています。遊女たちは、生活のため身売りをされた娘が多くいました。もともと貧しい家の娘のほかに、没落した豪商、医師、武家の娘も多く、そのうち幾人かは、史実の伝えたとおり、幕末から明治



にかけて、明治新政府の要人たちの妻となり明治の上流社会を担いました。芸妓も、家の没落により芸は身を助けるの諺通り自活の道として選ばれました。したがって、彼女たちが生家で使い、遊郭、あるいは、芸妓置屋で使っていたことばは、物言いのさらなる洗練さ（特に、最終語尾のやわらかな上昇化）が加われば、融合した状態で世間に通用していったと考えられます。「わ」も「よ」「こと」「もの」とともに、お嬢様が若者ことばとして上・中流階級の家々で使い、さらに、その娘であるお嬢様に使われ、お嬢様は若者ことばとして、さらに「しらないわ。よくってよ」などという自分たちのあるべき姿に見合った表現を生み出していったのです。

四 言文一致運動の頃『浮雲』の場合

ここで、時代的には先に話したことが重なります。さきほどの清水先生のお話にもでた「言文一致運動」は、この「わ」には直接かわりませんが、二葉亭四迷（一八六四～一九〇九）の言文一致作品である『浮雲』（明治二〇（一八八七）年）に「わ」が使われています。お勢さんが母親のお政とかわす一連の会話から「わ」を見つけ出すことができます。

「だけれども本田さんハ学問ハ出来ないやうだワ」

別のちよっとおいて、

「それは不運だから仕様がないう」と言っております。これもおそらく、私は「わ」って丸みを帯びて言いましたが、そのような「わ」だったと思います。

この会話でお母さんのお政さんは、娘に対して「わ」は使っていません。お母さんは当然幕末に生まれています。しかし、本田昇という官吏と話すときは、「わ」を使っています。

「虚言ぢやないワ 真実だワ（略）此様な邪見な子を持つたかと思ふとシミジミ悲しくなりますワ」

と、明治の山の手ことば、つまり、自分の品格を保つ、できるだけぶつきらぼうにはなくて、やわらかい言い方をしたいと思ったときに、「わ」が取り入れられます。今もあることですね。娘の言語状態に母親が合うことがあるということです。本田に同情を得ようとしているのです。娘の悪口を言いつつ、コミュニケーション上、娘と結婚させたい本田にすりようとする母親が使っております。

五 新しい女の誕生、漱石作品の女たち

ちよっとスペースがなくてレジュメにはあげることができませんでしたが、私がすでに発表しております『女ことばはどこへ消えたか？』（光文社新書）と『明暗』夫婦の言語力学（東海教育研究所）のなかから読み上げていきます。前者には、『三四郎』（明治四一（一九〇八）年）を中心とするいくつかの漱石作品が、後者では『明暗』（大正五（一九一六）年）が扱われています。

漱石の作品を若い頃からお読みになられている年代の方々が大概おられるので、どうぞ思い出しつつお聞きください。とてもよい場面です。一度めは帝大構内の池で、二度めは病院ですれちがった三四郎と美禰子さんが、広田先生の引越しの手伝いで初めて会います。そし

て、掃除がある程度終わって、二階で窓を見ながら、青い空に「雲が浮いている」のを共に見つめるというとてもロマンチックな場面です。

そこで、三四郎さんが美禰子さんの許婚であると思われる野々宮さんの受け売りで、ちょっと科学的なことを言うと、「あらそう」と美禰子さんは言うのですが、「雪じゃつまらないわね」と、否定を許さぬ調子で言い、「雲は雲でなくっちゃいけないわ」と言っているんです。これは彼女の三四郎に対する本当の心情の吐露になっています。つまり、自分の返事次第によっては、雲が雪のもとになっていった野々宮さんへの心情の近よりを表明することになるから、ここで絶対そうしたくない。一生懸命考えるわけです。そのときに、「雲は雲でなくっちゃいけない」と言う彼女の三四郎に対する恋の告白が生まれた。そのとき、「わ」をつけております。女だから文末に「わ」をつけておくなどという「わ」ではありません。ものすごく選んだ末の「わ」です。そのきっぱりとした主張を汲んで、三四郎は「なぜです」って聞いています。「何故^{なぜ}でも、雲は雲でなくっちゃ^いけないわ。かうして遠くから眺めてゐる甲斐がないぢやありませんか」

美禰子は、はつきり理論の元に使っております。女だから「わ」を入れたわけじゃないのです。『三四郎』全編を見ても、物語展開上で重要な場にしか使われていません。

『三四郎』をしっかりと読む前までは、漱石は会話に関してはステレオタイプだと言われていたので、私も「そうかなあ」と思っていました。とんでもない。やっぱりよく漱石は観察しています。会話だけステレオタイプにしたなんてありません。よく観察し、登場人物のことばとして選んできているなと思います。

別の場面です。グループでピクニックに行きます。三四郎の友人の与次郎——寅さんみたいな役回りの男性が「バスケットを車夫に持たせて来たのだろう」と聞くと、美禰子は「車夫は今日^{けふ}は使に出^でました。女だつて此位なものは持てますわ」と答えています。

自分が女性として男性に伍して日常を動いているというアピールをしたい。これを誰に聞かせたいのかと言うと、与次郎と共にいる三四郎にです。そして、「どうです里見さん、あなたの所へでも食客^{めいろう}に置いて呉れませんか」と、自分の妹を置いてくれないかと野々宮に言われたとき、「何時^{いつ}でも置いて上げますわ」って言うんです。これ、「何時でも置いて上げます」で切らないで「わ」を入れたのは、こう言うことによって、三四郎がどう反応してくるか、すごく見ているわけですね。一つひとつ見ていけば、名場面名場面全部「わ」が使われております。でも、たとえば、今話しました野々宮さんの妹は女学生ですから、当時の流行語として「わ」を使ったところもあります。それは読んで文脈から見えていくと、ここはその乗りで使っているなど、識別可能な範囲です。

三四郎はこれくらいにしておきます。

『明暗』の旦那さんの津田さん、気むずかしい人です。性格的には漱石をモデルにしたかと思いますが、キャラクターは背が高く、美男子という設定になっています。そういう外見の設定は、漱石の自画像に近いとやりにくいから、自分と逆のキャラクターを入れこんだ感じがします。

京都に住んでいるお父さんからの手紙を津田さんは待っていたんです。そして、津田さんが、



「御父さんからまだ手紙は来なかったかね」

と聞いたんです。それに対して、奥さんのお延さんは、

「いいえ来れば何時の通り御机の上に載せて置きますわ」

と言っています。この「わ」は、「あなたそんなこと言うけど、私は絶対にちゃんと郵便箱のなかを見ている」「郵便箱になかったんだから机に載せることもできない!」という、険しい物言いであり、女らしいやわらかさだけではないんです。「これから議論になってもかまわないわよ」っていう感じの「わ」を使っております。

この二人の夫婦の会話は陰険なものが多い。こんな陰険な夫婦はしんどいだろうなと思うくらいです。旦那さんが遅く帰ってきたとき、鍵を閉めていたから怒ったんですね。今とちょっと違います。今、合い鍵を持っていますから、すぐはいれますが、当時はそうじゃない。

「待ってたものがなんで門なんか締めるんだ。物騒だからかね」

「いいえ。——あたし門なんか締めやしないわ」

「だって現に締まっていたじゃないか」

「時が昨夕締めつ放しにしたまんまなのよ、きつと。いやな人」

「時」というのは女中さんです。

「時はどうしたい」

「どうしたい」は、江戸ことばです。江戸の名残りが残っています。「どうしたい」って旦那さんが聞くと、お延さんは

「もう先刻寝かしてやったわ」

と応じます。「私が寝かしたんだから、これ以上、あなたの権限で起こす必要はない!」というニュアンスで文末に「わ」を使った。夫への最後通告です。そのような強さを持つ「わ」です。そのような「わ」が、自己主張するには便利でよいとしてどんどん使われ、その自己主張する女たちを、いいなあと思ひ始めた男性たちの言語環境があります。新しい女として、自分の意見をはっきり言える女たちを、いいあつて持ち上げる男性の眼——それが、「わ」を助長させたとなると、そこからはフェミニズム論が扱う問題に踏み込んでいくことになるでしょう。

「わ」は、どんどん使われます。大正、大正一五年間は短いですがね。『明暗』は大正にはいつてから発表されています。そして、昭和後期になると、もうマーカーとしての機能しかありません。日常で使う私の「わ」はそうです。私はまだ、なんとなく身にしまった「わ」を使います。ところが、現代の若い人たちは——私も三〇年ぐらい前から気づいておりますが、「わ」を使わない。「よ」で十分なんです。「そっだよ」「ここにありますよ」と「よ」で事足りるのです。主張したいときも、「よ」は便利です。いろいろなところ、命令形にも使えますから便利で、もうほとんど「よ」でまかなっています。「わ」をもし現



代のお嬢さんが使っていたとしたら、探しているものが見つかったら、「ここにあったわ」（ワは下降調）、これは先祖返りをしているのです。

おわりに

中世期の、たとえば『史記抄』の「スハヨイハ」、『天草版平家物語』の「ことができたワ」は、気づきの「わ」です。現代の「わ」は、それに戻っています。そして別途、アニメーションとか吹き替えの女性のセリフや、お姉ことばとして、現代の若い方々が捨てた《やさしい

トーンを持つ女らしい「わ」は生き残ると思います。

今言ったのは、あくまでも、東京ことばの「わ」です。関西では、ずっと「わ」は男女ともに使われています。大阪出身の方は、女らしい「わ」はあんまりピンとこない方もいらっしゃると思います。

以上、「くわ」という小さな小さな表現——前後の先生たちのテーマのなかでも、もっとも小さなものを扱ったかと思いますが、近代日本語の一つの表現が、どのように出来上がって、どう捨てられていったかというのを感じただけであればありがたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

講演 漢語が日本語に溶け込むとき

田中 牧郎 (国立国語研究所准教授)

近代の語彙における漢語

私は、主に書き言葉で日本語の語彙が近代にどのように変わっていったかを、お話ししたいと思います。

日本語の語彙は近代に大きく変わりました。そのもつとも重要な変化の一つが、近代的な概念を表すため明治期に新しい漢語が数多く使われるようになり、その一部が日本語のなかに溶け込んでいったことです。そのような歴史をたどった漢語については、すでに諸先生方が多くの本で書かれております。図1にあげたのは一般向けに書かれたもののうちのごく一部ですが、さまざまな観点から近代の漢語が果たしてきた役割



- ・ 柳父章『翻訳語成立事情』(岩波新書、1982年)
- ・ 惣郷正明・飛田良文『明治のことは辞典』(東京堂出版、1986年)
- ・ 飛田良文『明治生まれの日本語』(淡交社、2002年)
- ・ 佐藤亨『現代に生きる 幕末・明治初期漢語辞典』(明治書院、2007年)
- ・ 田中牧郎『近代書き言葉はこうしてできた』(岩波書店、2013年)
- ・ 今野真二『日本語の近代—はずされた漢語—』(ちくま新書、2014年)

図1 近代の漢語の研究書 (一般向け)



田中 牧郎

東北大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学、東京工業大学大学院社会理工学研究科博士課程修了、博士(学術)。昭和女子大学専任講師、国立国語研究所主任研究員、同グループ長を経て2009年より現職。
専門分野：日本語学(日本語の歴史、言語コーパスによる日本語研究)

が研究されてきております。

しかし、近代の新しい漢語が全体的にどれくらいあり、それらがいつごろできたか、そのうちの程度が日本語に溶け込み現代に伝わったか、淘汰されてなくなっていた漢語と現代にも生きる漢語の違いはどこにあるのかなどについては、研究することが難しいためなかなかわかっていません。近代の語彙がどうやってできたのかは不明なことが多く残っています。近年、言語の全体像を把握し、細部の動きもとらえることができる言語データベースとして、「コーパス」が整えられてきています。日

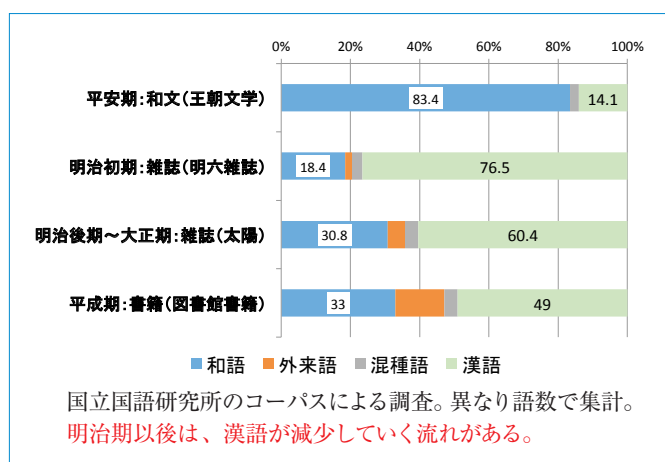


図2 漢語と和語の比率の歴史

本語のコーパスは、私たち国語研究所を中心に構築が進んでいます。コーパスを使って、日本語の歴史や現代日本語のありようを、さまざまな観点から正確に記述していく研究を進めております。

図2は、国語研究所のコーパスを使って、漢語と漢語に対立する和語を中心とした語彙の比率

の歴史をまとめたものです。平安期の仮名で書かれた王朝文学作品は八三・四パーセントが大和言葉、和語でした。鎌倉期、室町期、江戸期のコーパスは現在構築中で、まだデータを示せるものがありませんが、今日の話の中心になる明治時代では、その初期の雑誌『明六雑誌』(一八七四年創刊)のコーパスでは、和語はわずか一八・四パーセント、漢語は七六・五パーセントになっています。この平安期から江戸期への過程について研究することも重要ですが、このグラフの下の方の明治期からあとを見ても大きな変化がございました。漢語がだんだん減少して和語は増加していく流れが見られます。この明治以後の時代だけでも、漢語と和語の役割が大きく変化していったことが推測できます。

語種とは何か—和語・漢語・外来語—

今、漢語とか和語とか言ってきましたが、日本語学、言語学では厳密に定義されていますが、一般の方にきちんとご理解いただくのは少し難しいところがございます。たとえば、「桜」と、それに「花」をつけた「桜花」は大和言葉ですが、それを音読みで「おうか」と読めば漢語です。日本固有の言葉を「大和言葉」と言いますが、漢字で書いてあっても訓読みすれば大和言葉、和語です(図3)。それに対して、漢語には、古典中国語から借用した語彙と、音読みする語彙、そして日本で作られた和製漢語が含まれます。

そして、大和言葉には「桜」^{さくら}、「桜花」^{さくらばな}といった詩歌に詠まれる優雅なものもあれば、「くさめ」「くしゃみ」「むずがゆい」といった感覚的な俗っぽい語彙もたくさんあります。漢語にも、詩に使う言葉もあれば、

近代になって社会的な制度が変化することでできた言葉もたくさんあります。

また、外来語とは、古典中国語以外の他言語（主として西洋語）から借用した語彙で、日本でつくられた和製外来語も含まれます。たとえば、チェリー、デリケート、アレルギーなどです。

このように、和語と漢語はそのつくられ方が、日本固有か、古典中国語由来かで分けられ、外来語の場合は西洋語由来のつくられ方をしているということで、厳密に、どこでその語彙がつけられたかということではありません。語

のかたちが、日本固有語、古典中国語、西洋語のうち、どの言語らしいかによる分類と言えます。この語種の違いが、語彙のなかでの役割の違いに対応しています。そして、語種の観点から語彙の歴史を見ていくと、さまざまな日本語の問題が見えてきます。その意味で、日本語の語彙の歴史を考えると、語種に注目することがきわめて有意義です。今日はその

和語	日本固有の語彙、訓読みする語彙 桜(さくら)、桜花(さくらばな)、花見、愛(め)でる、粉(こ)、粉(こな)、くさめ、くしゃみ、むずむず、むずがゆい
漢語	古典中国語から借用した語彙、音読みする語彙、日本でつくられた和製漢語も含む 桜花(おうか)、賞美、花粉、鼻炎、炎(えん)、敏感、愛、美術、学校、悪化
外来語	古典中国語以外の言語（主として西洋語）から借用した語彙、日本でつくられた和製外来語も含む チェリー、デリケート、アレルギー
混種語	和語・漢語・外来語が2種類以上組み合わさった語 さくらんぼ、愛する、花粉アレルギー

- ・ 語種とは、語の形が、日本固有語・古典中国語・西洋語のうち、どの言語らしいかによる分類と言ってよい。
- ・ 語種の違いが、語彙のなかでの役割の違いと関わる。
- ・ 日本語の語彙の歴史は、語種の観点から描きやすい。

図3 語種とは何かー和語・漢語・外来語ー

- ・ 言語研究のためのデータベース
- ・ 実際に話されたり書かれたりした生の言葉が集積されている
- ・ 研究対象の言語を代表できるように資料が選定されている
- ・ 電子化され様々な情報がタグ付けされている
- ・ 誰でも使うことができる
- ・ 英語をはじめ世界の主要な言語で構築が進んでいる
- ・ 日本語のコーパスは国立国語研究所が中心になって構築中
『日本語歴史コーパス 平安時代編』(平安時代の和文)
『明六雑誌コーパス』(明治初期の学術総合雑誌)
『太陽コーパス』(明治後期～大正期の総合雑誌)
『近代女性雑誌コーパス』(明治後期～大正期の女性雑誌)
『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(現代の書き言葉)
『日本語話し言葉コーパス』(現代の話し言葉)
「UniDic」という電子化辞書で単語情報を自動付与できる

図4 コーパスとは何か

うち漢語について主に焦点を当てていきます。

近代語のコーパス

私どもの研究所では、近代語のさまざまなコーパスをつくっています。コーパスについてなじみのない方もいらっしやると思いますが、少し解説をしておきます(図4)。

コーパスとは、言葉の研究のためのデータベースです。実際に話さ

れたり、書かれたりした生の言葉をたくさん集め、それがコンピュータ上に集積されています。研究対象の言語を代表できるように資料が選定されており、研究目的に応じてさまざまなかたちで取り出せるようになっていきます。そして、検索のためにさまざまな情報がタグ付けされています。特に日本語の場合、分ち書きされないとか、漢字や片仮名などさまざまな文字を使う表記が多様であるため、タグ付けをきちんとしておくことがきわめて重要になります。

もう一つ重要なことは、それをつくった研究者が使うだけではなく、誰でも同じデータベースを使い、そこからあらわれる言語現象をもとに、みんなで議論することができるということです。英語をはじめ世界の主要な言語で構築が進んでいます。日本語のコーパスは私どもの研究所が中心になって構築中です。古いところでは平安時代から、本日紹介する近代の書き言葉では『明六雑誌コーパス』『太陽コーパス』『近代女性雑誌コーパス』を構築しております(図4)。

ちなみに、「UniDic」という電子化辞書で単語情報を自動付与できるようになっています。日本語は分ち書きされませんし、多様な表



図5 国立国語研究所のコーパス

記があります。それらを同じように単語で集計し、見出しをつけて、どんな言葉が何回、どのように使われているかが、自動的にわかるようにする電子化辞書「UniDic」を開発中です。

私どもの研究所のホームページから(図5)、時代順に平安時代から現代まで七つのコーパスを見ることが出来ます。また、単語情報をつけるための「UniDic」も時代別にあります。HPからダウンロードしていただけるものがたくさんありますので、ご関心のある方は、是非使っていただきたいと思います。

本日は、近代語のコーパスを使いながら近代の漢語について考えていきます。

『明六雑誌コーパス』と『太陽コーパス』

『明六雑誌』は、のちの時代に大きな影響を与えた学術啓蒙雑誌です。当時の洋学者たちが、西洋から取り入れた新しい考え方を国民に啓蒙する目的で創刊し、明治七(一八七四)～七五(一八七五)年の二年間にわたって数十冊刊行されております。西周(一八二九～九七)、福沢諭吉(一八三五～一九〇二)ら一六人が書いており、語数は約一八万語と

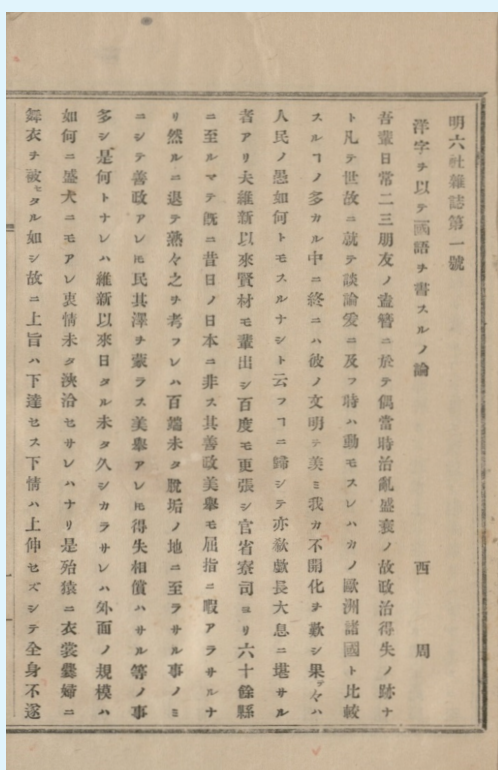
『太陽コーパス』に比べると少ないのですが、これに単語情報をつけて
 図6のように画像をあわせて読むようなかたちで二〇一二年に公開しております。

また、『太陽』は、明治二八（一八九五）年、さきほど清水先生のお話にでてきた国語調査委員会ができる数年前に創刊された総合雑誌です。この前年に始まった日清戦争（一八九四～九五）に勝利して、これから社会が大きく変わっていく時期に創刊されたもので、読者、ジャンルがきわめて広く、著者も『太陽コーパス』にいた五か年分六〇冊だけでも一千人になります。私どもは、創刊号から六年から八年刻みで、選んだ年についてはすべて各年一二冊ずつ計六〇冊の全文を対象にコーパスを構築しました。総文字

数は約一、四五〇万字、約八〇〇万字になります。これは二〇〇五年に公開し、現在単語情報付与の作業を進めているところです。まだ完全に終わっていませんので、現在は『太陽コーパス』はCD-ROMとして入手していただいて（博文館新社刊行）、解析する辞書「Unidic」を国語研究所のHPからダウンロードしていただいて、これにかければ、単語の頻度等を取付することができ

『明六雑誌コーパス』と『太陽コーパス』における語種構成比率

図7は、『太陽コーパス』で「桜花」を検索した画面です。「桜花」という文字の前後の文脈がでてきます。そして、何年の何号の、誰が書いたどの記事にでてくるか一覧で表示されます。たとえば、一番右側に話者と種別で表示されていますが、四番目の「桜花」の例は、本居宣長（一七三〇～一八〇二）の、和歌にでている場合です。それには典拠が表示されています。この画面を見るだけでも、語彙がいつごろ使われていたか、どんな人が使っていたか見当をつけることができます。



学術啓蒙雑誌『明六雑誌』
 （明治7～8(1874～75)年刊）の全文を対象
 総語数：約18万語
 著者数：16人
 単語情報によって検索できる
 原文画像とリンクあり
 2012年公開
 国語研サイトから無料ダウンロード可

図6 『明六雑誌コーパス』

ファイル 編集 ツール ヘルプ														
検索文字列 フィルタ コーパス 検索オプション														
本文 桜花														
前文脈 で終る 検索 字体変換														
後文脈 で始まる クリア														
no	前文脈	キー	後文脈	雑誌名	年	号	題名	著者	位置	欄名	ジャンル	文体	話者	種別
1	月を眺み、散策せんに	は興限り無し、	桜花	太陽	1895	01	京都の新案内記	中川四明	P072B22	地理	NDC291	文語		
2	遠きは見て驚くなり、	近きて是は驚く	桜花	太陽	1895	01	正月	大橋之羽	P157B03	家庭	NDC386	文語		
3	も人の朝に結まはなし、	さるに我が	桜花	太陽	1895	02	臺灣櫻島記	山田新策	P055B12	地理	NDC295	文語		
4	こと能はず、若し夫れ	朝日に匂ふ山	桜花	太陽	1895	02	月と花	三宅雪嶺	P094B16	雑録	NDC914	文語	本居宣長	讀文
5	に睡る心地するなり、	現に華貴の子が	桜花	太陽	1895	02	月と花	三宅雪嶺	P094B18	雑録	NDC914	文語		
6	の子が桜花を憐れむと	し、騎兵の馬が	桜花	太陽	1895	02	月と花	三宅雪嶺	P094B18	雑録	NDC914	文語		
7	遠、朝は、我も彼も大抵	同じ、而して	桜花	太陽	1895	02	月と花	三宅雪嶺	P095A09	雑録	NDC914	文語		
8	一世の推す所と爲り、	其富を味ひ	桜花	太陽	1895	02	明治の我園に關す	野口華章	P102B26	雑録	NDC920	文語		
9	而して鐘の衣衣提は	黒地に帝冠に	桜花	太陽	1895	03	京都の都説	*	P122B30	芸苑	NDC386	文語		
10	の鳥さるべきこととな	らずや表に描く	桜花	太陽	1895	03	山沢と玉章翁	三輪青谷	P170B16	美術	NDC721	文語		
11	漸くおまじ彩霞錦と	して木を去らす	桜花	太陽	1895	03	山沢と玉章翁	三輪青谷	P170B19	美術	NDC721	文語		
12	歌集の如き詩にて	應酬筆の	桜花	太陽	1895	03	平安朝記を博覧会	野口勝一	P188B07	社会	NDC606	文語		
13	るも語に達し過ぎず	櫻花に已に	終して	太陽	1895	03	平安朝記を博覧会	野口勝一	P189A06	社会	NDC606	文語		
14	なれば他家のものど	を羨み、手に	桜花	太陽	1895	04	加藤清正(承前)	小倉秀實	P047A09	史伝	NDC289	文語		
15	北京の城上空たかく	静くは雲が	桜花	太陽	1895	04	今様新体詩	多	P115B16	文苑	NDC911	文語		
16	開かれたり、其他の	知人に到りては、	桜花	太陽	1895	04	近衛公の家説	大橋之羽	P115B01	家庭	NDC289	文語		
17	佐吉神田に詣て	文脈に達するも可	なり	太陽	1895	04	京都博覧会(上)	野口勝一	P189B21	社会	NDC606	文語		
18	には無味に歸すること	、恰も春風亂和	桜花	太陽	1895	05	文芸上の倫理	南睦夫	P020A13	論議	NDC901	文語		
19	る此節月ぞ、顔に	通しけける中にも	桜花	太陽	1895	05	日本と欧米	熊田雄軒	P022B07	論議	NDC361	文語		
20	有す、天に月光の	沈つたるあり、	地に	太陽	1895	05	感情を讀して詩人	右橋之月	P035A24	論議	NDC910	文語		
21	地寺亦た名あり、	静寂の東に	花に、	太陽	1895	05	京都の新案内記	中川四明	P057B20	地理	NDC291	文語		
22	り、日本の名勝と	讃ふべし、	地に近來	太陽	1895	05	京都の新案内記	中川四明	P057B26	地理	NDC291	文語		
23	ば、龜嶺は西に見え、	千鳥島の湖に	は	太陽	1895	05	京都の新案内記	中川四明	P058B06	地理	NDC291	文語		
24	に在りては富士山の	如く花に在りては	桜花	太陽	1895	05	我邦風土の美	野口勝一	P096A23	雑録	NDC701	文語		

図7 『太陽コーパス』で「桜花」を検索した画面

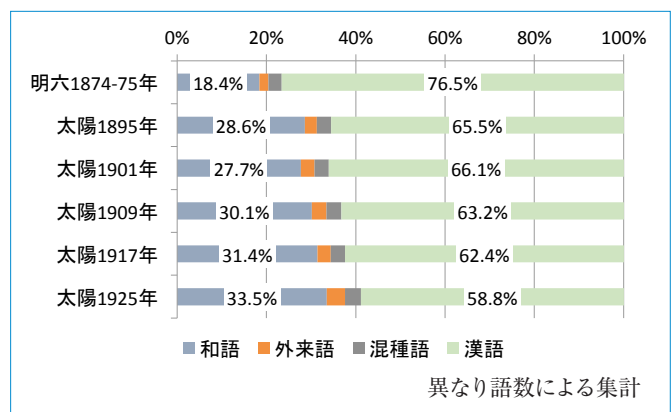


図8 『明六雑誌コーパス』『太陽コーパス』の語種構成比率

安榮(安らかに榮えること) 易直(安らかで素直なさま)
 一姓(出身を同じくすること) 遺力(残された力)
 役使(命令して使うこと) 外顯(外に現れること)

外交に於ては他邦の民情及び之を統治する所の制度を知り以て
 我国人の安榮幸福に至る可き目的を定め
 (『明六雑誌』10号・杉亨二「真為政者の説」1875年)

本居宣長の「式島の日本心を人間ば朝日に香ふ山桜花」と詠
 ぜしは即ち此易直の質を以て我が国民の氣風に烙印を居ゐたる
 者にて
 (『明六雑誌』32号・西周「国民氣風論」1875年)

図9 『明六雑誌コーパス』に一定頻度以上あり、『太陽コーパス』にない漢語(一部)

『明六雑誌コーパス』と『太陽コーパス』の語種構成比率を一覧にすると、図8のようになります。さきほどは平安期から現代までを大きく並べましたが、明治七(一八七四)年から大正一四(一九二五)年までに限って語種構成比率を見ても、漢語は次第に減つていき、その分、和語が増えていくことがわかります。外来語、混種語はこの時期、大きな変化はありません。

漢語が減っていくので使われなくなる漢語が多いだろうという見当がつきます。図9にあげた「安榮」「易直」「一姓」などは、『明六雑誌』

にはかなり使われていますが、『太陽』ではまったく使われていません。

ちなみに、「外交に於ては他邦の民情及び之を統治する所の制度を知り以て我国人の安楽幸福に至る可き目的を定め」(『明六雑誌』一〇号・杉亨二「真為政者の説」一八七五年)で、「我国人の安楽幸福に至る可き」の「安楽」という語は、安らかに栄えることであることは、字を見れば見当はつきますが、現代語ではすでに使われておりません。『太陽コーパス』の時代、つまり明治後期に使われなくなっていた語です。このように、明治初期にた

くさんあった漢語の多くが使われなくなっています。

一方、『太陽コーパス』の初めのころの年次、明治二八(一八九五)年、明治三四(一九〇二)年には一定頻度以上ありますが、後半の大正六(一九一七)年、大正二四(一九二五)年にはない漢語の一部を図10に示します。「**𩇛𩇛**」(アイタイ、雲などが厚く空を覆っていること)、「**𩇛𩇛**」(イイ、よろこび楽しむさま)など、**𩇛𩇛**が厚く空を覆っていること、「**𩇛𩇛**たる処」といった言い回しにある「**𩇛𩇛**」という語は、数十年のあいだにまったく使われなくなっています。

𩇛𩇛(アイタイ、雲などが厚く空を覆っていること)
怡怡(イイ、よろこび楽しむさま)
畏憚(おそれて遠慮すること) 衣袂(イベイ、着物のたもと)
叡聖(徳があり賢明であること)

氏が着色画中の傑作たるが如し紫雲**𩇛𩇛**たる処光明十方を照らし唯見る至尊の金容蓮上に儼然として円満の法界を現ずるを

(『太陽』1895年3号・岡倉天心「橋本雅邦」)

故れ余輩が所謂世詩は、花に譬へば桜花の如く、学問に配すれば哲学の如く、**怡々**として美人に対し、肅々として聖哲に対するが如し、

(『太陽』1895年11号・桐生悠々「社会と詩歌と」)

図10 『太陽コーパス』の当初の年次(1895年、1901年)に一定頻度以上あり、後の年次(1917年、1925年)にはない漢語(一部)

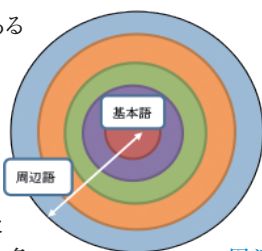
近代の語彙における漢語の性質

漢語が減っていくのは漢語の勢力が衰えるということを意味しているのですが、実際の語彙はもう少し複雑です。そう単純に漢語がすべて衰えていくことではございません。

語彙の構成について少し整理しておきます。語彙はある構造を持つて層をなしております。図11はそのことを同心円で表しています。中心部にきわめてよく使われる重要な語、すなわち基本語があり、周辺

基本語
語彙の中心にある
不動で
高頻度な語
明治期から大正期にかけて**周辺語化**する語彙の約80%は漢語
明治期から大正期にかけて**基本語化**する語彙の約65%は漢語

周辺語
語彙の周辺にある
流動的で
低頻度な語
和語・外来語には動きが少ない



和語：基本語と周辺語に多い
漢語：中間語に多い
外来語：周辺語に多い
周辺語化する語彙にも基本語化する語彙にも漢語が多い

図11 近代の語彙における漢語の性質

部にいくほど頻度が低く、あまり重要でない、滅多に使われない語彙となります。その図では五段階で示していますが、実際はこれが連続的に層をなしています。そして、現代語の語彙調査でも明らかになっていることですが、一般的に、中心の基本語には和語が多く、周辺の語彙に外来語が多くなっています。ただし、和語は基本語から中間語、周辺語まで万遍なく広がっています。

漢語の特徴は、中間語に多いということです。和語、漢語、外来語という語種の区別が、日本語の語彙を考えるときわめて重要な視点を提供すると最初に述べましたが、こういった日本語の語彙のなかでの役割を見ても、和語、漢語、外来語の一般的な性質を指摘することができます。中間的な段階に多い漢語が、大きく変化する近代においては外側へいき、周辺語化していくものが多くあります。

ところで、コーパスを使うと、数値を基準にいろいろなことができます。今日その基準のとり方を説明することは煩雑ですのでやめますが、ある基準で周辺語化する語彙を抽出すると、その約八割は漢語でした。一方、だんだん基本語化する語彙の約六五パーセントは漢語でした。つまり、非常に多くの漢語が語彙のなかでの位置を変えて動き、和語と外来語はあまり動きません。このことが近代における語彙の一つの特徴として指摘できます。

頻度が増加する漢語 — 基本語化する漢語 —

周辺語化する漢語は、さきほど述べた「贅黷」「易直」などといった言葉で、多くあります。その一方で基本語化する語彙にも漢語が多く

あります。今日はこの基本語化して現在にも生き残って重要な語としてはたらいっているものに注目していきたいと思います。

頻度が増えていくと同時に、いろいろな人が使うようになりま

す。そして、いろいろなジャンル、会話でも使われるようになります。使われ方も広がっていきます。そのことを、『太陽コーパス』を中心に見てみます。頻度の増加することを指標として、どのような漢語が、どのように基本語化していったか、つまり日本語に溶け込んでいったかを見ていきたいと思います。

さきほど、ある基準で基本語化する漢語を取り出したと申しましたが、実際は百数十語がリスト化されています。そのうちわかりやすいものをいくつか図12に示しました。たとえば、「野球」「映画」は江戸時代以前にはなく、近代になって欧米からはいつてきて日本社会に浸透していった語彙です。野球という語は、明治三四（一九〇一）年まで一回もでてきません。明治四二（一九〇九）年にでてきます。

映画は、大正六（一九一七）年から四回、二二回。その他、「投資」「摂取」「印象」「活躍」「努力」「実現」「優秀」「表現」といった漢語は、当初はなかったか非常に少なかったのですが、明治後期、大正にかけ



語	品詞	1874-5年	1895年	1901年	1909年	1917年	1925年	計
野球	名詞				14	2	16	32
映画	名詞					4	22	26
投資	名詞-サ変可能			30	13	18	24	85
摂取	名詞-サ変可能		1	5	23	16	24	69
印象	名詞-サ変可能	1		6	55	70	39	170
活躍	名詞-サ変可能			1	12	47	82	142
努力	名詞-サ変可能	3	11	12	95	324	300	742
実現	名詞-サ変可能		10	22	84	177	97	390
優秀	形容詞-一般		4	3	24	59	44	134
表現	名詞-サ変可能		5	55	69	68	73	270

図12 基本語化する漢語の年次別頻度（一部）

愉快廻ぐりの建物、山羊車、鞆轡、競走場、ベースボール場等の
設けあれば桑港の小児は絶えず茲に集へり。

（『太陽』1895年2号・山岸藪鶯「桑港繁昌記」）

早稲田対慶應の野球仕合は当分見られぬ事となれり

（『太陽』1909年14号・無署名「小是非」）

各劇場は活動写真、義太夫、手品等を興行して大入を占めようとし

（『太陽』1901年10号・上司子介「寄席と家庭」）

次の映画が始まった時、牧田はもうお重の隣へ席を遷してびつたり
寄り添ひ乍らひそ〜〜話し合つて居た。

（『太陽』1917年10号・谷崎精二「淋しけれども」）

図13 「ベースボール」から「野球」へ、「活動写真」から「映画」へ

「投資」という言葉も「野球」と同じころ使われ始めます。『明六雑誌』四〇号では、「百円の価に十円を投ずる如く」とでてきますが、

「活動写真」という語も少し使われ続けます。当初のより原始的なありようから少しずつ、動き回る写真という「活動写真」から「映画」へ進歩していきます。その過程で、さまざまな語が試みられ、「映画」という語で定着していきます。新しい事物がはいってきて、それと同時にその名前が定着する、溶け込むというより、さまざまな語で表現しながら、どの語を使うと新しい事物にぴったりくるか、日本社会の一つの事物として定着していくか。そこには物事、事物、概念と、言葉、特に漢語とがかかわりあい、試行錯誤しながら、いつしか一つの語に決まっていくな過程を経ていると思われま。

て頻度を増やします。日本語として基本語化したわけですから。次に、いくつか具体的に見ていきましょう。

「ベースボール」から「野球」へ、「活動写真」から「映画」へ

まず「野球」という語です。いきなり野球がさかんになって「野球」という語が広がったという単純な話ではありません。初めはアメリカ

カのサンフランシスコに視察にいった人の報告に、ベースボール場があったというように、片仮名の「ベースボール」が外来語として表現されます。それが日本にはいつてこの球技がさかんになっていくと、「早稲田対慶應の野球仕合」というように、「野球」という語に変わります

（図13）

「映画」もそうです。まずは、「活動写真」と表現されるところからで、大正時代になると「映画」という語が普通になっていきますが、

一八九五年の『太陽』では、「其田圃は資本を投すべきの業場にあらずして」とか「大学在職中聊か資金を投じて該器を調製せしめ」といった言い方が先にできます。そこから、「投資」という二字の漢語ができ、「投資」という語で定着していきます(図14)。やはり、概念と言葉が試行錯誤を経ながら一体化して、その概念が日本語のなかにきちんとはいっていくのだと思われます。

また、「摂取」という字面の言葉は、古くからあります。『日本国語大辞典』は平安末期の説話集からあげております(図15)。仏が衆生を救うことという意味です。ところが、近代の福沢諭吉の例をひいている部分には、「自分のものとしてとり入れること。また、栄養になる物などを体内にとり入れること」とあります。随分意味が離れております。ですから、仏教語とは別のところで、新しい意味の言葉ができ、それがたまたま摂取と同じ表記であったので、同じ語のように見えて

百銭の価に十円金を投ずる如く

(『明六雑誌』40号・阪谷素「養精神一説(一)」1875年)

其田圃は資本を投すべきの業場にあらずして

(『太陽』1895年4号・横井時敬「土地兼併の弊害」)

大学在職中聊か資金を投じて該器を調製せしめ

(『太陽』1895年7号・無署名「科学」)

是れコーク製造工業より生ずる利益が資本家をして大に此工業へ投資せしめたるが為なり。

(『太陽』1901年2号・金子篤寿「工業世界」)

図14 「資本(資金)を投ずる」から「投資」へ

『日本国語大辞典 第2版』(小学館)

(1) 仏語

(イ) おさめとってまもること。仏が衆生を救うこと

* 九冊本宝物集〔1179頃〕「摂取の光明は念仏者を照し給ふ」

(2) 自分のものとしてとり入れること。また、栄養になる物などを体内にとり入れること

* 文明論之概略〔1875〕〈福沢諭吉〉五・九「其教は悉皆政権の中に摂取せられて」

『太陽コーパス』

(1) の意味 ※漢文の引用箇所だけに見られる

経に「光明遍照、十方世界、念仏衆生、摂取不捨」と云へるを(1895年2号・加藤咄堂「禅学流行の主因及禅宗の現勢」)

(2) の意味 ※多く見られる

一は英国の思想を摂取したるものにして(1901年10号・無署名「人物月旦」)

脂肪を摂取して健康を保持し(1925年12号・岡村金太郎「肝油みそ汁の話」)

図15 「摂取」の意味交替

いるのだと思います。一見同じような語でも、そこに意味の大きな違いがあつて、そこに交替が見えているものも結構指摘することができ

ます。『太陽コーパス』には、さきほどの図15の一番目の仏教語の意味は、漢文の引用箇所だけに見られます。多くの例は、二番目の「自分のものとして、自分の精神にとり入れる」、あるいは「栄養として物理的に自分の体にとり入れる」の意味です。このように新しい語が近代でつくられ、そのままスッと定着したというより、さまざまな過程があつ

て、やがてある語に決まって基本語化していくことが見えます。そのあたりをもう少し丁寧に見ていきます。

意味変化を起こして基本語化する漢語

図16は、『太陽コーパス』で「活躍」の用例を検索したものの一部です。『太陽コーパス』で検索すると、用例が時代順に並んで表示されます。一番古い例は、明治三四（一九〇二）年八号にある「エミール・オーリック」という題名の記事です。エミール・オーリック（一八七〇～一九三三）とはオーストリアの人名で、その人のことを吉岡芳陵が書いています。典拠の欄が表示されていますが、典拠に記述があるのは、その記事の著者が書いたものではなく、著者がどこから引用しているか、小説の場合だと誰かの会話部分になっている場合です。そのことがわかるように表示されます。

「活躍」の初出例を見ると、典拠「スチューディオ」とあります。調べてみると、当時ヨーロッパに『スチューディオ』という雑誌があったようです。そこに載っているエミール・オーリックについての記事を、吉岡が訳して『太陽』に載せたようです。図16にその例を示しますが、「悉く活躍の妙を呈し来らざるなし」。おそらく、この文の背後に西洋の言語があったと思われる。

もう一つ、『太陽』と比較するために『近代女性雑誌コーパス』で「活躍」を検索すると、最初にでてくるのは「米国ハリス夫人の寄書」（一八九五年二号）です。これもアメリカのフロラ・ビー・ハリスが書いたものを訳したものです。

『太陽コーパス』で「活躍」を検索した画面の一部

10	前文脈	キー	後文脈	雑誌	年	号	題名	著者	欄名	ジャーナル	種別	語源
1	の筆に入るものは悉く活躍	の妙を呈し来らざるなし	大陽	1901	08	エミール・オーリック（本	吉岡芳陵	李庭鈺著	NDC723	典拠	『スチューデイズ』	
2	製鋼工場内部の光景を活躍	現前せしむ。さて之	大陽	1909	02	湖山王	佐野天声	文芸	NDC912			
3	妙な調子と青年特有の活躍	たる人生觀に貫かれた	大陽	1909	06	露軍実業主義の創始者（三	早坂夢	文芸	NDC980			
4	を促し、國民良心の活躍	を促すべきである。	大陽	1909	08	政界腐敗の真相	奥田三郎	論説	NDC312			
5	、同僚は其の作品を活躍	せしむと見たのは	大陽	1909	11	文芸時評	長谷川天溪	文芸	NDC904			
6	山陽は人心中に英雄を活躍	せしめ、王政復古を	大陽	1909	12	日本現代の史学及び史家	山陽夢山	人物月旦	NDC210			
7	と云ふ。是れ部分に活躍	する全體の力を看破す	大陽	1909	12	日本現代の史学及び史家	山陽夢山	人物月旦	NDC210			
8	物。風雨乃至風家の活躍	する状態を心算に會	大陽	1909	12	予の意見	斎藤孝の	文芸	NDC910			
9	岩崎親は強に於て大活躍	を認むる可く勉めの	大陽	1909	14	高野田時評を論ず	福田三三	論説	NDC377			
10	關東會館に義氣として活躍	し來つたは當然の事	大陽	1909	14	高野田時評を論ず	福田三三	論説	NDC377			
11	の方面に向つて如何に活躍	して強に才筆を運ける	大陽	1909	14	高野田時評を論ず	福田三三	文芸	NDC377			
12	人は無遠慮に、人物活躍	せる事、経歴の口説	大陽	1909	14	平泉の七日（提前号）	黒田龍心	文芸	NDC521			
13	もあり。すべて人物活躍	を見るに至り、七年	大陽	1909	14	平泉の七日（提前号）	黒田龍心	文芸	NDC521			
14	警軍中再び善悪西里の活躍	を見るに至り、七年	大陽	1917	01	論平和恒久戦争	浅田江村	文芸	NDC329			
15	は常に其の才筆で活躍	せしや無遠慮に來らざる	大陽	1917	01	論平和恒久戦争	浅田江村	文芸	NDC329			

彼れは軽く一筆を着けて立ちに物の感情を写し彼れの筆に入るものは
悉く活躍の妙を呈し来らざるなし

（『太陽』1901年8号・吉岡芳陵「エミール・オーリック」）

貴国の詩人福地源一郎氏が歌はれし帝国萬歳萬々歳なる
活躍文字を読むにつけ

（『女学雑誌』フロラ・ビー・ハリス「米国ハリス夫人の寄書」1895年2号）

※『近代女性雑誌コーパス』における初出例

西洋語からの翻訳

芸術作品に描かれたものについて

図16 「活躍」の初出例

「活躍」が翻訳語だという研究は、今のところ私が見た限りありませんでした。『太陽』と『女学雑誌』で両方とも最初にでてくるのが、西洋人が書いたものの翻訳であることから、この語は西洋語の翻訳語だと思われます。ただし、これらのコーパスでは原文はコーパス化されていませんので、原語がなんであったかはわかりません。

もう一つ重要なことは、どちらも、絵画や詩歌のような芸術作品に描かれている物象が、その絵や文のなかで勢いよく踊るという意味合いで使われていることです。現代語の、人間などが活躍するという意味とは少し違います。

少し詳しく見ます(図17)。「活躍」という語は、はじめ絵画や文章、芸術作品のなかに描かれているものが勢いよく踊るという意味でした。それは図17の上の二つの例のように「躍動」「活動」など、「活躍」の類義語も同じです。コーパスの初期の例では、これらの類義語は、すべてそのような意味で使われていました。ところが、後期になると、「山本君の精力、あの活躍ぶりは」(『太陽』一九一七年六号、坪内士行「社会劇都へ」)や、「躍動する人々の数を挙げれば」(『太陽』一九二五年五号、好学山人「我国事業界に於ける慶応閥の努力」)、「国家の活動に依頼して」(『太陽』一九一五年六号、天野為之「国債償還論」)などに見られるように、意思を持ったものが動き回るという意味合いに変わっていきます。

「活躍」一語の変化ではなく、「躍動」「活動」の頻度もこの時期増えていきます(図17)。こういった類義語は同じような意味変化を起こしていたことに、コーパスを見ることができるところがわかります。

さらに、数百例がそろってでてくるものを細かく分析していくと、実際に、いつごろ、どのような変化が起こったかがかなり詳しくわかり

美術の大作か宗教的心霊の手に成る偶然に非ず、**霊精躍動**し、神気晃耀たる、雄作が能く人の心をして無限の歓喜と信樂を起さしむるも亦此が為のみ、
(『太陽』1895年12号・無署名「宗教」)

歴史は記憶の再現にして、**美文**は**空想の活動**なり。
(『太陽』1895年3号・石橋忍月「美文と歴史との間に一線を画す」)

それに又**山本君の精力**、あの**活躍**ぶりは普通の者には到底出来ないからな。
(『太陽』1917年6号・坪内士行「社会劇 都へ(二幕)」)

今義塾出身者にして各種の銀行会社に**躍動**する**人々**の数を挙げれば
(『太陽』1925年5号・好学山人「我国事業界に於ける慶応閥の努力」)

国家の活動に依頼して (『太陽』1895年6号・天野為之「国債償還論」)

語	品詞	語種	1895年	1901年	1909年	1917年	1925年
活躍	名詞-普通名詞-サ変可能	漢	0	1	12	47	82
躍動	名詞-普通名詞-サ変可能	漢	1	3	2	4	8
活動	名詞-普通名詞-サ変可能	漢	106	131	255	268	214

図17 「活躍」「躍動」「活動」の意味変化

ます。このような研究が、コーパスを活用することで新しくできるようになりました。こういうことがコーパスを使う醍醐味だと思います。同じように、多くの語について、いつごろ使われ始めて、どう変化していったのがわかっていきます。たとえば、「努力」という言葉は、きわめて当たり前の言葉のように思えますし、字面自体、古代か

らあります。しかし、現代語と同じ「頑張る」「つとめる」といった意味で使われるようになるのは、明治期です(図18)。「明六雑誌」にも「憤発努力」と使われています。「憤発」とかいいう現代語の努力よりもっと、うんと気合いを入れて頑張らなければいけない、つまり頑張る度合いが当初の努力という言葉のほうが強く感じられます。

図19は、「努力」という言葉と、それにあたる大和言葉、和語の「つとめる」という言葉の前にくる助詞を比較したものです。左側のグラフで青

は「を」をつとめる「功を積むことをつとめる」、つまり、つとめる目的語が「を」で示されるものです。赤は、「

につとめる」です。「実を挙げる事につとめる」。ご覧のように、初めは「を」

が中心でしたが、だんだん「に」が中心に変わっていきます。段階的な少しずつの変化です。一方、右側のグラフ

の「努力」という言葉は、「を」はほとんどとりません。初めから「に」をとる言葉として使われていて、頻度が増

えています。つまり、「つとめる」という言葉が、「を」より「に」をとるよ

うに意味変化して、その意味変化とあ

竊に望むらくは諸君更に憤発**努力**して速に我帝国至当の治刑條例を草
定奏上せんを (『明六雑誌』10号・津田真道「拷問論」1874年)

人あるべし 王法の賞の及ぶところに非ずとも天皇の褒賞必ず疑あるべから
ざるべしなれば**努力**せざるべからず (『明六雑誌』37号・中村正直「賞罰毀誉論」1875年)

当局者須らく條約上の權利を維持することに**努力**せざる可からず。
(『太陽』1909年4号・浮田和民「米国に於ける排日問題」)

頻度	1874-75年	1895年	1901年	1909年	1917年	1925年
努力する	3	4	10	46	113	116
つとめる	62	501	469	301	224	187

図18 「努力する」の意味変化

温故知新の功を積むを勉めたれば

(『明六雑誌』10号・中村正直「西学一斑(一)」)

聯合の實を擧げる事に勉めて居る

(『太陽』1909年6号・牧野伸顯(談)「名士の奥洪国観」)

條約上の權利を維持することに**努力**せざる可からず

(『太陽』1909年4号・浮田和民「米国に於ける排日問題」)

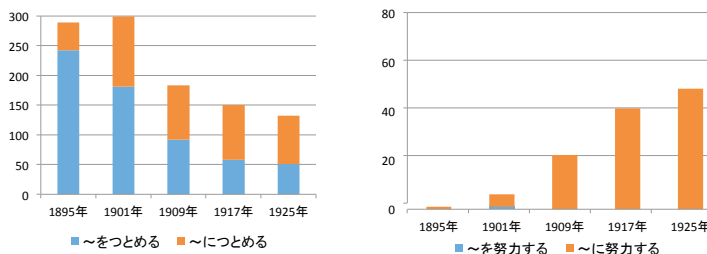


図19 「～をつとめる」から「～につとめる」への変化と「努力する」の基本語化

漢語が日本語に溶け込むとき

基本語化するというより、他の語の関係性のうえでこの語が必要とされ、日本語に溶け込んでいったのだらうと思われます。

このように基本語化を、よりわかりやすく溶け込むというような比

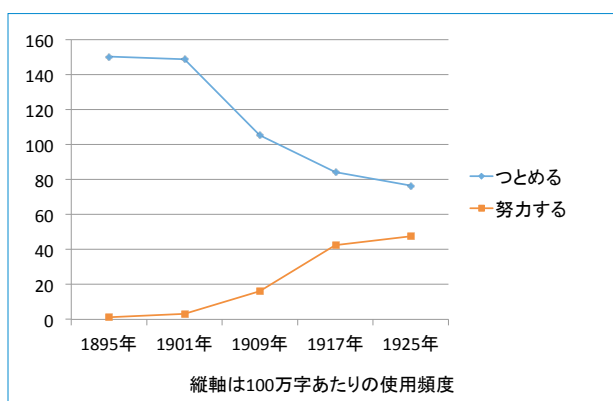


図20 「努力する」の基本語化と「つとめる」

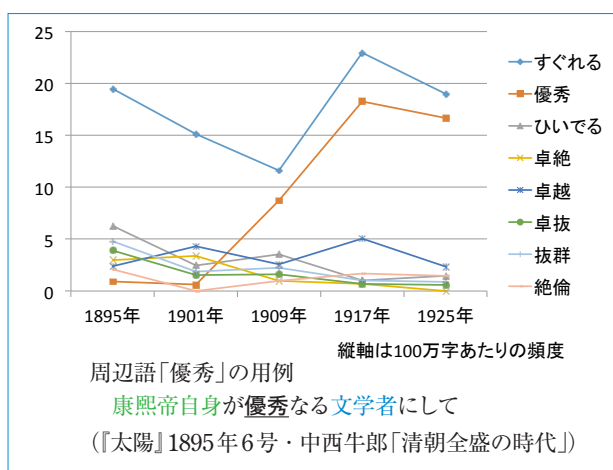


図21 「優秀」の基本語化と「すぐれる」

日本人は人種として如何に優秀であつても努力なくしては
 歐米人と匹敵して、事業を經營することは出来ない。〔中略〕
 我々は僅か五六十年の内に巧みに彼等の工業の外形を模
 倣し得る丈の優れた素質を有するのであるから、
 (『太陽』1925年7号・藤原銀次郎「事業經營上より比較し
 たる黄白兩人種の優劣」)

放送無線電話聴取用無線受信機を買ふに就て、注意すべ
 き事は二つある。その一つは感度の極めて鋭敏なるべきこ
 と、次に選択性の優れたことである。〔中略〕受信機は
 単に感度がよいばかりでは未だ完全とは申せないのである。
 感度が優秀となればなるほど、

(『太陽』1925年2号・安藤博
 「放送無線電話の発達とその聞き方」)

図22 基本語「優秀」と「すぐれる」の使い分け

喩的な表現をしました。今説明した「努力する」の基本語化と「つとめる」の頻度をまとめると図20のようになります。『太陽コーパス』は年によって全体の語彙量が少し違いますので、これは百万字あたり何回でくるかという頻度を示したものです。ほとんどなかった「努力する」が次第に増加して、「つとめる」とほぼ同じくらいの頻度になっています。和語と対等の漢語になっていったわけです。

コーパスを使うことで同じような変化をするものがたくさん見つかりました。たとえば、「優秀」という言葉は、初めは非常に少なかったのですが、一気に基本語化します。そして、もともとあった「すぐ

れる」という言葉と同じくらいの使用頻度になります(図21)。「卓越」「卓越」「卓抜」のようなさまざまな類義語もありますが、それらはけっして基本語化することなく、周辺の語に置かれたままです。大和言葉でも「秀でる」という語は、やはり頻度が低いまま、むしろ減っていきます。「すぐれる」と「優秀」の二つが基本語化して、日本語の語彙として定着したと思われます(図22)。このように近代にさまざまな類義語が位置を変えて、そのなかに漢語がはいってきます。

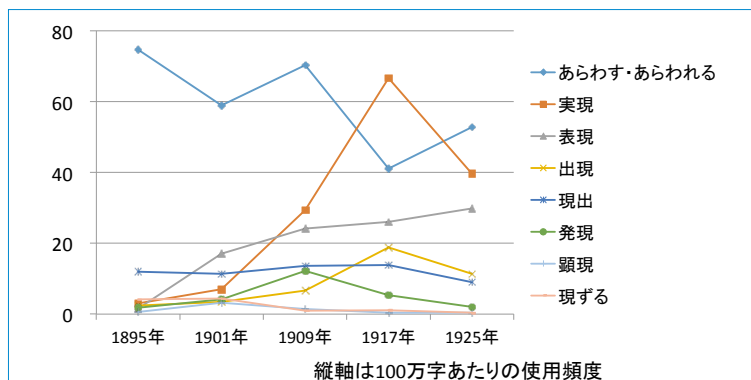
図23を見ると「あらわす」「あらわれる」が少し頻度を減らすなかで、「実現」と「表現」は非常に少ない頻度から多くなっています。この三

語が頻度が高いものとして、基本語化しているということです。当初の使われ方を見ると、「実現」や「表現」は現代とちよつと違います(図23)。「基督に於て実現された完全なる神人の合一」「神と人がキリストによつて合一される」と言うように、実現不可能なことを言う場合に使われています。現代語でもこのような言い方をしますが、現代語の「実現」「表現」の広い用法のなかではごく一部です。そして、「実現」

は現代語の場合に比べてなかなか実現しない、その程度が強い、著しいようなときに使う傾向があります。当初は現代語の意味と少し違っていたことが、このような例を見ることがわかります。そして、頻度が増えていくことによって意味も変わっていきます。

基本語化した後の「優秀」と「すぐれる」を見て

いくと、非常に近い意味で使われています(図22)。同じ記事のなかで、ほぼ同じように、「優秀」と「すぐれる」が使われている例があります。しかしよく見て



周辺語「実現」「表現」の用例

故に支那人は未だ嘗て基督に於て実現されたる如き完全なる神人の合一を予想せざるなり (『太陽』1895年12号・丸山通一「儒教管見」)

諺文は(中略)皆能く其処を得て言語を表現するに於て些の阻碍あらず (『太陽』1895年5号・三宅雪嶺「国字を論ず」)

図23 「実現」「表現」の基本語化と「あらわす・あらわれる」

	何が「あらわれる」か？	何が「実現」するか？
活動にあたる語句	事実、記事、宣言、話、作品、文、歌、文字、現象、現実、問題、出来事、事、行動、発達、 変革 、気風、習慣、制度、(ほか多数)	統一、合同、独立、平和、政治、改正、引退、更迭、協力、借款、撤廃、注文、選挙、利下げ、 改革 、物価を下落せしめること、(ほか多数)
成果にあたる語句	結果、影響、成績、功績、名、實、弊害、弊、(ほか多数)	結果

「あらわれる」：活動によってつくり出されるもの、活動によって見えるようになるもの

「実現」：具体的な活動そのもの、特に政治や社会に関わるもの

此の小作人の思想上に現れた**変革**が、彼等の行動をして力強く或る種の理想到達手段化せしむるに到つた。

(『太陽』1925年14号・中沢弁次郎「農村争議と分配問題」)

併し真成の**改革**は猶ほ**実現**し**無い**、

(『太陽』1917年13号・米田実「露西亞の政局」)

図24 基本語「実現」(自動詞)と「あらわれる」の使い分け

いくと、微妙ですが、使い分けがあったようです。たとえば、「すぐれる」を見ると、「素質」と「選択性」という語句と一緒に使われていて、人や物事の性質について言うときは「優秀」より「すぐれる」のほうを使う傾向がありました。一方、「優秀」は、「人種として」、あるいは「感度」という語句と一緒に使われていて、具体的なことについて言う

「実現」と「あらわれる」も違いがあるようです。何があらわれる（出現する）かの「何が」の部分に使われている語句を並べたものが図24です。非常に似た語句があるように見えますが、重なっているものは少ないです。「あらわれる」は、「宣言」「話」「作品」というように活動によってつくりだされるものや、「現象」「現実」など活動によって見えるようになるものが多くなっています。ところが、「実現」は、具体的一回一回の活動、「合同」とか「独立」とかいった語句です。「更迭」「協力」は一回一回の事柄です。どちらかと言うと社会的、政治的なものが多くなっています。やはり、漢語のほうが近代的な文脈で使われやすく、そうでないところに大和言葉、和語が使われます。このことは「実現」と「あらわれる」だけでなく、「優秀」と「すぐれる」でも同じような傾向がありました。ですから、ほぼ同義の意味を表しているけれども、細かいところでは意味によって使い分けられ、和語と使い分けられることで、漢語が日本語に溶け込んでいったと思われます。

まとめ

漢語は語彙の構成の中間あたりに多くありましたが、それが近代の大きな語彙の変化によって、周辺に位置を変えていくものと、中心に引き寄せられるものに分かれていきます。そして、全体としては減少して、周辺語化して消えていくものが多いのですが、重要な漢語のあ

るものは、中心に溶け込んで和語などと使い分けられていくと言うわけです。

このように、漢語という観点から、近代の日本語がどのようにして新しい語彙体系をつくりあげていったかをコーパスをもとに話してみました。

今回お話しした内容は、私でなければできない研究ではありません。コーパスですから、誰でも使えるかたちで情報がついておりますので、是非、多くの方にコーパスを使った研究をしていただければと思います。どうもありがとうございました。



講演 新しい世界のことばとしての漢字表現

齋藤 希史（東京大学教授）

はじめに

今、田中先生のご講演で、漢語が近代になって一気に増え、それがだんだん日本語のなかに落ちていく、溶け込んでいくというお話をされました。私はその前段階、つまり、漢語がどのようにして、近代のはじまりに増えたのかをお話しさせていただきたいと思います。たとえば田中先生のお話にも「活躍」が翻訳語ではないかという大変示唆的な指摘がありました。このように漢語の増大の背景として翻訳があること、それが具体的に漢語の増大にどうかかわっているのかを中心といたします。

まず、翻訳と言うと、漢文の訓読も翻訳と言えは翻訳ですが、これは文字をそのままにしています。漢字はそのままにして、それをどう読むかという翻訳です。しかし、ヨーロッパ語から日本語への翻訳とはちよつと違います。文字そのものが変わります。アルファベットから日本の仮名とか漢字に変えていくわけです。それは、漢文を読み下すなり、書き下すなりするのは大きく異なる翻訳です。その意味で、多くの日本語話者にとってヨーロッパ語との出会いは、漢文との出会

いは違った翻訳という営みを要請したということになるかと思えます。

その翻訳のなかで近世になって最初に広く行われたのはオランダ語からの翻訳です。長崎における貿易のための通訳だけではなく、いわゆる蘭学がさかんになるにつれて、オランダ語からの翻訳も多く行われるようになりました。では、その翻訳に使われた日本語文はどのようなものだったのでしょうか。オランダ語はどのような日本語に翻訳されたのでしょうか。

と言いますのは、近代以前の日本語には、さまざまな文体があつて、その使用範囲や内容によって、使い分けがなされていたからです。現在のように、基本的には漢字平仮名交りの口語体が用いられているのは状況が異なっていました。



齋藤 希史

京都大学大学院文学研究科博士課程中退。
京都大学人文科学研究所助手、奈良女子大学文学部助教授、国文学研究資料館助教授を経て、2012年より現職。
専門分野：中国古典文学・漢字圏の言語と文化

そうした文体の違いに着目しながら、蘭和辞典から英華辞典へ、古典漢語から近代の学術漢語へと二つの流れを軸に、新しい世界のことばとしての漢字表現についてお話ししたいと思います。

一・蘭学の翻訳

a. 『解体新書』(一七七四)

『解体新書』をご存知の方は多いと思います。オランダ語の医書『ターヘル・アナトミア』を杉田玄白(一七三三―一八一七)・前野良沢らが翻訳したもので、現物を見れば一目瞭然ですが(図1)、漢文で訳されています。『解体新書』は、オランダ語から漢文への翻訳、正確にいうと、日本語で翻訳して、それを漢文に直して、つまり漢作文をしたものです。

ではなぜ、漢文で訳したのでしょうか。そのことについて、のちに大槻如電(一八四五―一九三二)が杉田玄白から聞いた話として、次のように言っています。大意を申し上げますと、「オランダ語の医学を広めたいが、医者たちはみんな、いわゆる漢方を奉じているから、まずその根本、つまり中国から変えないとダメだ。漢文で訳せば、これが中国に伝わる。そうすれば、向こうの医者たちも目を覚ますことができる」と。

言ってみれば、当時の彼らにとっては漢文が知的世界における普遍的な言語であつたわけです。と同時に、ここにはつきりとは書いてはありませんが、古典的な言語でもありました。つまり、漢文には伝統があります。『論語』や『孟子』を挙げるまでもなく、古い書物を学んで、読み書きできるようになるのが漢文です。そして、広がりと言う

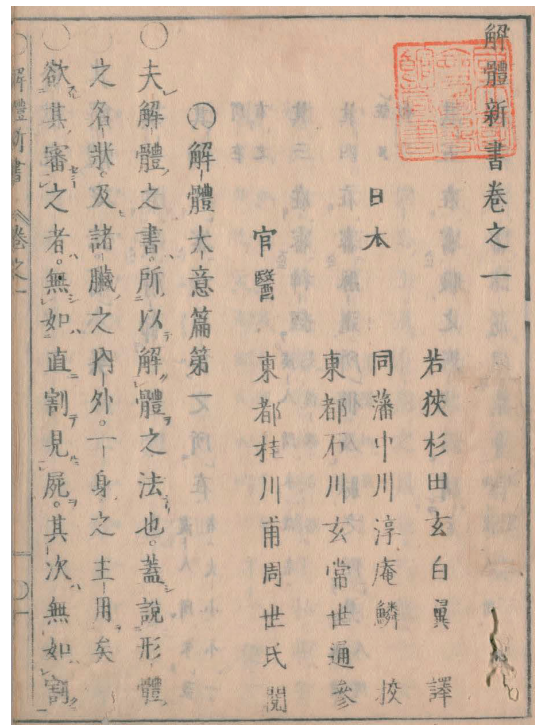


図1 解体新書(国立国会図書館蔵 引用)

と、当時の東アジアは漢字漢文の流通圏で、漢文は東アジア全体を覆う普遍的な書き言葉でした。その意味で、翻訳も、一つの基準が漢文に置かれていました。

b. 『和蘭辞彙』(一八五五―五八)

もう一つ、ヨーロッパ語の翻訳は、中国が先行していました。中国にやってきた宣教師たちがさまざまな書物を、当然、『聖書』も含まれますが、漢文に翻訳しています。それが日本にはいつてきたという流れがあります。その意味で、今風に言うところグローバルと言うのでしょうか、翻訳の言語は漢文であつたと言うことができます。

ところが、当時のオランダ語と日本語の対訳辞書『和蘭辞彙』をよく

福沢諭吉(一八三五―一九〇二)

は、こうした現象を見て、これは洋学者たちが装いを凝らしたかった、つまり、漢学者に對抗したかったからだろうと言います。通俗的な文体では漢学者に軽んじられかねない。漢文的な言葉を使っただろうが見栄えはよくなる。そのため苦勞して漢語を用いて翻訳をしたのだと言うのです。

「江戸の洋学社会を見るに、著訳の書、固より多くして何れも仮名交じりの文体なれども、動もすれば漢語を用いて行文の正雅なるを貴び、之が為めに著訳者は原書の文法を讀碎きて文意を解するは容易なれども穩当の訳字を得ること難くして、学者の苦みは専らこの辺に在るのみ。其事情を丸出しに云へば、漢学流行の世の中に洋書を訳し洋説を説くに文の俗なるは見苦しとて、云は、漢学者に向て容を装うもの、如し」〔福沢諭吉「福沢全集緒言」一八九七〕

確かにそうした側面もあるかもしれませんが、つまり、漢学者への對抗のために、通俗よりも古典を重んじるような傾向が洋学者にあったということです。福沢は、それが明治期における漢語の氾濫の原因であると考えているようですが、しかし、私はそれだけではないだろうと思っています。それが次の『英華辞典』の到来、第三の漢字語という視点です。

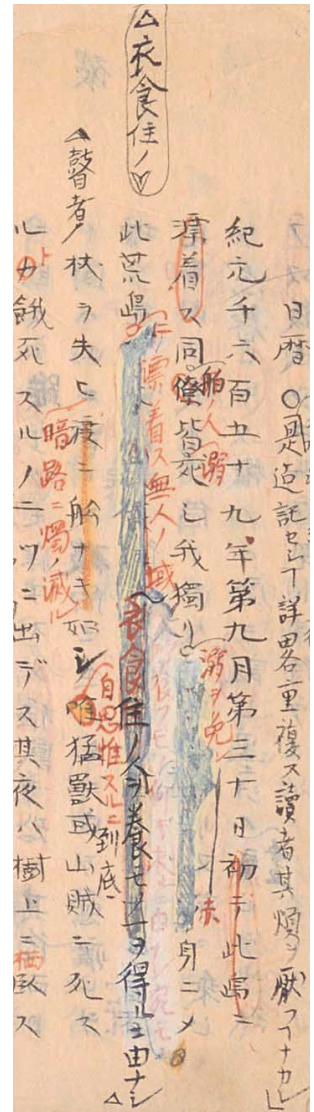


図3 『魯敏孫漂荒紀事』(京都大学附属図書館蔵 引用)

二. 『英華辞典』と近代学術用語

a. 『英華辞典』の奔流

ここで一つ、小さいことのように見えて重要なことがあります。オランダ語と漢文の対訳辞書はないということです。もちろん、どこかで作られていたかもしれませんが、印刷物として広く流通しているものはないと思います。ですから、長崎の通詞たちは『蘭仏辞典』をもとにして、オランダ語と日本語の辞書をコツコツと作ったわけです。

ところが、英語に関しては、中国やその周辺にやってきた宣教師たちが英語と中国語の対訳辞書、つまり『英華辞典』をたくさん作っていて、それが日本にどんどんはいつてきます。これは大きいことです。

日本でも広く使われた W. Lobscheid (一八二二―没年未詳) の『英華字典』を見ると(図4)、「あれ?」と思われるかと思いますが、前のほうから順に読んでいくと、「規矩」「風俗」とか普通の漢語だなあときて、「幫襯人」、今の中国語で読むと「bang chen ren」という言葉があります。これは中国の俗語です。古典的な漢語しか知らない人には多分わかりません。「幫襯人」の右側に書いてあるローマ字は、広東語と当時

「これは経書のどこそこにあつて」という縛りから、漢語が解き放たれたことになりました。それでどのようなことが起こったのか。たとえば、井上哲次郎（一八五六―一九四四）が明治一四（一八八一）年に東京大学から出版した『哲学字彙』という、哲学というより学術のための英語との対訳語彙集を編纂して、その序文を書いています。興味深いのは、次の部分です（図6）。

まず、これまでの訳語のなかで、これは『英華辞典』も多分含まれていますが、妥当なものを採用したと言っています。さらに、彼らが新たに訳語を定めるとき、『佩文韻府』とか『淵鑑類函』『五車韻瑞』の他にもいろいろな本を使つたと書いてあります。さきほど紹介した『佩文韻府』もありますね。そのため、この序文だけ見ると、当然、私たちは、古典語の流れをくんでいると思つてしまします。

ところが、たとえば「Coexistence」には「俱有」という訳がつけてありますが（図7）、これは古典とは意味がつかないのです。「俱有」は『俱舍論』に載っていますし、唐の杜甫（七一二―七七〇）の詩にもあると言つて、わざわざ杜甫の詩を引いています。しかし、杜甫の詩では、「学識は皆あつた」という、訓読すると「ともにあり」という意味の「俱有」です。これは「coexistence」ではありません。『俱舍論』も関係ありません。つまり、出典が書いてあるように見えて、これもさきほどの田中先生のお話とも通じると思いますが、外形的な部分は一致しています。なにか典拠らしく載せているのですが、「coexistence」に対応する文字として「俱有」を新たに定義し直しているのです。いったん古典から離れた、ふわふわ浮いていると言うとちよつと語弊があるかもしれませんが、縛りから離れた漢語を、もう

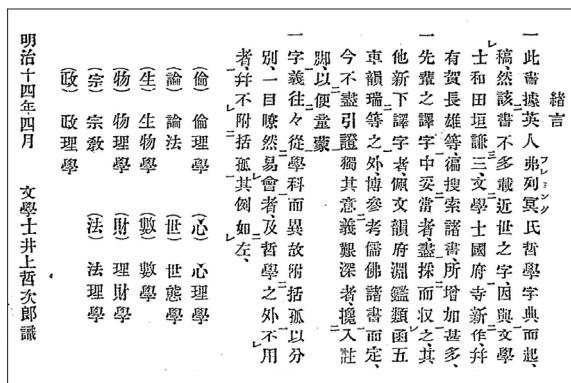


図6 哲学字彙(国立国会図書館蔵 引用)

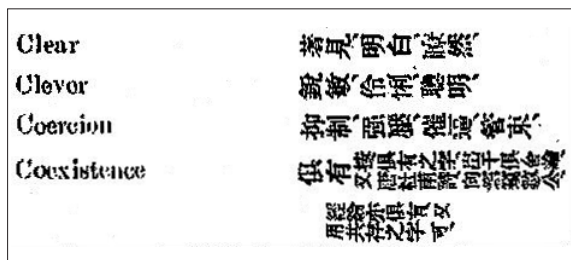


図7 哲学字彙(国立国会図書館蔵 引用)

一回、英語を中心とするヨーロッパ語に結びつけているわけです。その作業が、『哲学字彙』（一八八一）のような語彙集で行われています。

C. 英文漢訳

もう一つ別の例を見てみましょう。中村正直（一八三二―一九二）が東京大学でどんな授業をしたかを報告しています。当時も、成果報告書みたいなものを書かなきゃいけなかったわけで、授業の報告を書いているわけです。

「毎月大約二三回作文ヲ試ミタリ、ソノ文ハ之ヲ添削シ或ハ評語ヲ加ヘ以テ之ヲ奨励セリ、文題ハ我ヨリ出スコトアレドモ、大抵ハ

学生ヲシテ平日ソノ読メル英書ヨリ一二章ヲ抽キ出シ、漢文ヲ以テ
翻訳ナサシメタリ、コレハ余少シク英書ニ通スルノミナラズ、該学
生固ヨリ英学ヲ可ナリニ能クスルコトナレバ、カクノ如キ課業ハ後
来ニ至リ英漢対比スル訳文ヲ造ルノ特ニ補益アルベシト思ヘルナリ、
又目今ノ利便ニモ漢文ヲ作りナガラニ英文モ細読シ訳語ヲ考求シ得
ベク、功力分レズシテ一挙兩得ノ益アルベシト思ヒタルガ故ナリ、
学生モコノ挙ヲ喜ビ、勉強シテ従事セシカバ一学年ノ終ニハ大ニ進
歩ヲ見ハシ、余ガ意ヲ満足ナサシメタリ」〔中村正直「年報」(「東京
大学第一年報」起明治十三年九月止同十四年十二月)〕

これからわかるように、英語を漢文で翻訳させています。漢作文を
やらせているわけです。もともと漢文を作文するのは、古典籍を読ん
で、漢籍を読んで、読みぬいて、文章を作ることです。韓愈(七六八
〜八二四)や柳宗元(七七三〜八一九)の文章を読んで、漢文を作るの
がまっとうなやり方です。古典に基づいているわけです。

ところが、中村正直は、もともと昌平坂学問所で漢学を修め、イギ
リスに行つて英語ももちろんできた学者ですが、英語を漢文に翻訳し
ろというわけです。ベースとなる言葉は、古典ではなく英語に置き換
わっているんですね。そういうかたちでの漢文という意識がここに出
ています。これは大変に興味深いことです。

三. 新しい世界のことば

a. 『西国立志編』(一八七〇〜七二)

中村正直が翻訳した『西国立志編 原名自助論』という明治期の大ベ

ストセラ―にも、「習慣ハ第二ノ天性」として「人ノ品行ハ、善キ習慣
ノ力ニ頼ルコト、細々ナラズ、故ニ善キ習慣ヲ養ナヒ長ズレハ、善ニ
進ミ、惡ニ遠ザカル為ノ大裨益トナルナリ、常言ニ曰ク、人ハ習慣ノ
一塊肉ニシテ、習慣ハ第二ノ天性ナリト、」(第十三編)と出てきます。

And here it may be observed how greatly the character may be
strengthened and supported by the cultivation of good habits. Man,
it has been said, is a bundle of habits; and habit is second nature.
(Chapter XIII)

「習慣ハ第二ノ天性ナリ」の英文は「habit is second nature」です。中
村の言う「習慣」というのは、さきほどあげた『孔子家語』にでます
から、それを出典としてもよいはずですが、ここはそういうことではな
く、英語に対応するものとして出てきています。『西国立志編』出版以降
の多くの読者にとって、「習慣ハ第二ノ天性」は中国の古典を思い出させ
るものではなかったでしょう。つまり、このSamuel Smiles(一八二一〜
一九〇四)の『Self Help』(一八五九)の『自助論』が、中国の古典に代わっ
て、出典としてすりかわった、置き換わったと考えることができます。

そして、私たちが『日本国語大辞典』やいろいろな辞書で「習慣」を
引くと、「習慣は第二の天性ナリ」がでています。近代日本語になつて
いるわけです。このような流れがあることが見えてくるかと思ひます。
そうやって作られた漢語が、私たちの世界でどのような新しさを
持ったかということについて、さらにお話ししたいと思います。

b. 科学のことば

さきほど、『哲学字彙』が学術用語の翻訳語彙集であつたとお話しし

ましたが、やはり、新しいヨーロッパの学問、とりわけ自然科学の導入は、それまでになかった知識を日本列島という空間にもたらしめた。その訳文、翻訳の文章がどうなっているか、ちょっと見てみたいと思います。

Archibald Geikie (一八三五―一九二四) というスコットランドの自然地理学者が、自然地理学についての初歩的な教科書、"Elementary Lessons in Physical Geography" を一八八六年に著しています。この Geography を当時は「地文学」と訳していました。『藝氏地文学』という書名でも訳されていますが、「藝氏」は、Geikie のことです。

面白いことに、同じ年に訳本が二種類出ています。で、微妙に違います。

「雲昇騰シテ大気ノ上層ニ至リ、恆風界中ニ入レバ、飛龍ノ勢ヲ以テ、千里ニ行流スルコトアリ、春日好風ノ候、仰ギテ天ヲ見レバ、白雲ノ大空ヲ飛行スル影ノ、大地ヲ急遽スルコト速ナルアリ、試ニ此速力ヲ測量スレバ、一時間ニシテ三四十里ヲ急飛スルモノアルベシ、又雲形ヲ視ルニ、或ハ蒼狗ノ如ク、或ハ龍鱗ノ如、故ニ其大ナルハ、山嶽ノ如シ、其細微ナルハ、春水ニ似タリ、蓋シ雲原ト無心ナリ、而シテ斯ノ如キ形状ヲ呈スルハ、前段ニ所謂大気ニ不斷ノ流動アルニ因ルナリ」[富士谷孝雄訳補『中学校師範学校教科用書 藝氏地文学』(文部省編輯局、一八八七)、第十章「大気の乾湿」]

「第廿二節 雲若シ上層ノ気流中ニ生ズルカ又ハ上昇シテ之ニ漂到スルトキハ偉大ナル速力ヲ以テ長大ノ距離を延單ス東風遅々春光駘蕩ノ時ニ在リテハ其歩頗ル緩慢ナルカ如シト雖トモ亦其陰影ノ岡原上ヲ通

過スル速力ヲ以テ之ヲ考フルトキハ其速力ハ一時間二十八「マイル」乃至百二十「マイル」ノ割ナルヲ知ルナリ地上ヨリ之ヲ望見スレハ其動揺時々廣狭ヲ變ジ互ニ上下回轉シテ小大窮リナク以テ大気ノ中ニ不朽ノ運動アルコトヲ証明ス」[志賀重昂校閲・島田豊訳述・三浦應訂校『地文学』上(共益商社、一八八七)、第十章「空氣の湿氣」]

原文は次のようになっています。

22. When clouds enter or are formed in one of the upper steady-air-currents they are borne along, sometimes for great distances and at a great rate. On a breezy spring day, they may be seen sailing across the sky at what may seem a leisurely pace, which, however, by the rate at which their swiftly-moving shadows fly across hill and plain, is proved to be sometimes more than 80 or even 120 miles an hour. They can be watched continually changing shape and size as they move along, rolling in huge folds over each other, sometimes lessening and sometimes increasing, and in all these movements testifying to the ceaseless turmoil of the atmosphere in which they are suspended.

ちなみに、上の富士谷孝雄は当時の東京大学の先生で、教科書として訳しています。もう一つの島田豊は英語の翻訳家で、いろいろな本を訳しておられます。両者の訳文を見ると、前者は、なんとなくか漢文のようで、たとえば、前者は「飛龍ノ勢ヲ以テ」、後者は「偉大ナル速力ヲ以テ」としています。英語では、「飛龍」とあるので「ドラゴン」と書いてあるのかしらと思って見ても、「ドラゴン」は当然でてきません。つまり、富士谷先生は漢文調で訳し、島田さんは、どちらかと言えば直訳調で訳しています。



細かく見ていくと、明治期では、大量の翻訳語を導入して、漢字片仮名交じりの文語体を駆使しながら、さまざまな言葉の空間を作っていたことがわかります。古典から離れた漢語を自由に使う過程で、あえて古典語に近い格調を求めることもありました。一方で、できるだけ直訳的な、英語を想起させるような文体で書くこともありました。それは必ずしも一枚岩というか、一つのトーンではありません。直訳調のなかにも、漢文的な言い回しはいつています。いろいろな偏差、バリエーションがあります。そのようなさまざまな文体が試されるなかで、近代の新しいことばの空間ができたということではないでしょうか。そしてそこには科学の翻訳のことばが、意外に大きな位置を占めています。

c. 空気・大気・雰囲気

科学のことばが、私たちの日常語にはいつている例を、最後にお示ししたいと思います。

さきほどの原文を見てお気づきになられたでしょうか。「*atm.*」という単語を、上の例では「大気」と訳し、下の例では「空気」と訳しています。「大気」と「空気」です。

ここには出ていませんが、「*atm.*」ではなく「*atmosphere*」には、当時三つの訳がありました。多くは今でも「空気」を使いますが、「空気」と「大気」と、もう一つ「雰囲気」です。今私たちは、「雰囲気」は科学用語としてはごく稀にとい

うか、使っている科学の論文はないわけではありませんが、一般の人にとって科学用語であるより、むしろ日常の言葉です。「この店は雰囲気がある」とかです。それに対して、地球の周りを覆っているのは「大気」ですよね。「この店には大気がある」とは言わず、「この店には雰囲気がある」と言います。また、「地球の周りは雰囲気で覆われている」とはあまり言わないですよ。しかし、明治の初年、幕末ではそのような言い方をしていました。「雰囲気」は、科学の言葉から生まれているのです。青地林宗（一七七五～一八三三）の『気海観瀾』（一八二七）には「雰囲」とあります。

「地球為氣海中之一大体、亦有所自發之氣、周圍其外、此謂之雰囲。
「*atm.*」雰囲之低処、即是地面」

これは地球の大気というか周りのことです。そこにあるのが、「雰囲」なわけです。この「雰囲」の低いところが地面だということです。

また、明治になってから、小幡篤次郎（一八四二～一九〇五）という慶応の人の『博物新編補遺』（一八六九）に「雰囲気論」があり、そこには「世人常二空氣ト唱へ學者之ヲ雰囲氣ト名クル一種ノ氣狀アリテ地球ノ全周ヲ包メリ」、つまり、「これは一般には「空気」というが、学者は「雰囲気」という」と書いてあります。つまり、純然たる科学用語として「雰囲気」は登場したんですね。

これもさきほどの田中先生のお話に通じるといえますけれど、いろいろな脈絡があつて、最終的に私たちは「空気」と「大気」と「雰囲気」とをそれぞれ違うように使い分けていますが、そこに至るまでには、こうした言葉のドラマがいろいろあったということで、私のお話はここで閉じさせていただきたいと思います。ありがとうございました。

講演

近代日本語における識字とメディア

土屋 礼子（早稲田大学教授）

はじめに

話がだいたいぶ進んできてお疲れになっていくかと思いますが、これまでお話になった先生は皆、言語学、国語学、国語史等の専門です。私はどちらかというとメディア、特に新聞史を研究してきた人間です。メディアと識字に関心を持ち、明治初期の新聞から研究しております。その観点からお話をさせていただきます。

論を始める前に、本日のテーマである「近代の日本語」として何を指定するのか、という問題がまずありますが、私の報告では、近代日本国家の統治の下で、日本列島を中心とした領土で、一九世紀末から二〇世紀末までの射程で、そこに住んでいる人々が主に話したり書いたりして使っていた言語を、とりあえず「近代日本語」という名称で括っておきます。さきほどの齋藤先生も田中先生も、どちらかという知識人が使う日本語を中心にお話しくださいました。それは、近代日本語の最上級のエリートが使う部分です。近代日本語と言ったとき、その上層部だけでなく全体を考える必要があります。そのようなパー

スパクティブを持って、近代日本語と対応する文字や書記言語が、どのようなメディアを通じて人々の生活の中に広まり、意識されていったのか、近代日本語における識字とメディアとの関係について、おおざっぱに一世紀くらいの変遷の見取り図を描いてみたいと思います。

私はメディアの研究者ですので、まずは印刷言語からスタートしたいと思います。

一・活版印刷による新聞雑誌が切り拓いた方向性

近代日本語における識字の土台となったのは、徳川幕府下で発展した書き言葉の文化です。手紙をはじめとする手書き文字による文書類と写本、木版製版による印刷物



土屋 礼子

一橋大学大学院社会学研究科博士課程修了、博士（社会学）。大阪市立大学文学部を経て、2010年から現職。早稲田大学20世紀メディア研究所所長。
専門分野：メディア史、近代日本のジャーナリズムとメディアに関する研究

が都市を中心に多数流通していました。木版製版は日本の江戸時代に非常に発達した印刷方法です。ほとんどの本や有名な浮世絵、戯作本などは全部その方法で刷られました。

一方で、活版印刷は、明治期に初めて取り入れられたのかというと、違います。一五世紀末に、活版印刷の技術はヨーロッパから朝鮮半島を通じて日本に入ってきています。京都で一部、五山版ござんぱんといった經典などが活版で印刷されますが、あまり長くは続かないで終わります。いったん終わった後、幕末になって新たに西洋から輸入するかたちで広まります。

なぜ活版が、江戸時代に新しい技術なのに広がらず、木版製版がずっと続いたのかも、メディア上、非常に面白い問題ですが、今日はそこに深入りしている時間はないので端折ります。

その木版製版を基にして、書き言葉が印刷されたわけです。印刷された書き言葉は、基本的に話し言葉と分裂しており、同じ言葉ではありません。話したように書くという思想は、「言文一致」と呼ばれる考え方で、近代後半、それも明治末になってから活版に出てきます。江戸時代にはそういった発想はありません。基本的に書き言葉と話し言葉は別々でした。地域的な話し言葉の差異は非常に大きかったのですが、書き言葉にはほとんど反映されていませんでした。書き言葉は役所の言葉と同じで、全国的に統一されたものと考えていいでしょう。今日の小林先生のお話にもありました戯作などに記された話し言葉は、江戸や京・大阪といった限定された範囲の話し言葉で、俗語として登場しますが、「お国言葉」は通常は記されませんでした。

識字は、江戸時代の地域と社会階層によって大きく異なっており

ました。一般的に、日本は江戸時代の識字率が世界の中ではわりと高かったと言われていますが、それはある一部をとると結構高いということです。どういうことかと言うと、江戸や京・大阪といった都市部に住んでいる支配階級である武家の男性が一番高い識字層です。一番読み書きができない層は農漁村部で、しかも女性が中心となります。その間にグラデーションが広がっているのが江戸時代の現実です。基本的には読み書きは、武家、商家、僧侶の男性以外にほとんど必要とされませんでした。寺子屋が発達して読み書きを習う人がいたと言いますが、それはほとんど男性です。女性はほとんど寺子屋にも行っておりません。非常に偏った識字だったということです。ある階層にとっては必要ですが、それ以外には読み書きが必須ではなかったというのが、近世の世界です。

こうした近世の識字状況を変革するメディアとなったのが、幕末から明治初期にかけて導入された活版印刷による新聞雑誌です。明治半ばまで印刷物の多くを占めていたのは木版製版でしたが、幕末にまず、木でできた木活字ができます。最初、新聞は木活字を使っていました。次いで、鉛合金による活字印刷が輸入技術として導入されました。たとえば、福沢諭吉（一八三五―一九〇二）の有名な『学問のすゝめ』（明治五年、一八七二年初版）という大ベストセラーも活版印刷で刷られたのですが、後からは木版製版でたくさん刷られます。明治初期は活版技術と両方あった時代です。明治半ばまでは、木版で刷られたものも多く流通していましたが、一方で、活版印刷がどんどん導入されていく過程だったわけです。

この活版印刷がどういった変化を促す契機となったかと言うと、一

つは、草書体による候文から、楷書体による漢文訓読体への移行を促進したことです。寺子屋、「手習い塾」と言いますが、そこへ子どもが行くと、最初に手習いをするのは、今のようにな一字一文字離れた楷書ではなく、草書で候文です。楷書は後から習います。それは、当時の必要度にに応じていたわけですね。ところが、活版印刷は一字一字バラバラですから、バラバラの楷書のほうが基本なのです。

また、活版印刷は書くことと読むことの分離を進行させました。一般的に識字というと「読み書き」を指しますが、「読む」と「書く」ことは別の能力です。もちろんつながってはいますが、皆さん読めるからと言って書けるとは限りませんよね。これは識字調査をすると必ず出るのでですけど、読むほうが高く、書けるほうが低いんです。パーセントの差が出ます。留学生も、今はワープロがあるので読めるし書けるのですが、ワープロがないと書けないといった状況があります。こういった分離が進行すると、活字印刷されている場合は読めるが、自分で難しい字は書けないといったことが起こります。

他方、草書体を読める者は、書ける者と一致する割合が高くなります。皆さんの中で書をやったことのある方はわかんと思います。草書体を崩したのは、これをこうやって書くんだということがわかってないとなかなか読みにくい。つまり書けることと読めることが、非常に近接している。もちろん例外もありますけど、楷書体の活字を読める者は、必ずしも書けないという幅が広がってきます。

同時に、書き手による文字の特徴が残る木版製版と異なり、活版印刷の文字は書き手の個性を抹消し、発信者として平等な地平に立たせることを可能としています。つまり、木版の場合も書き手の文字の特

徴がある程度残りますが、活版は完全に標準化されていますので、それを男が書いたか女が書いたか、文字の上手な人だったのかといったことは全然問われません。誰が書いたか、わからない状況になります。話し言葉の場合、話し手が誰かということはなかなか切り離せません。ところが、活版印刷の場合、その人が年をとっているのか、女性なのか、偉そうな人なのか、太った人なのか、全く関係ありません。そういった自由さを促進させることになります。

そして一方で、さきほどの齋藤先生のお話にもあったように、古典や手本による定型句から特に漢字を開放しました。漢字は古典の中に入っていますが、これを活版印刷によっていろいろなかたちでこれまでの古典の定型句から解放することが、活版では自由になります。そして、個々の漢字を組み合わせて新たな意味を表現する自在を生み出しました。

しかし、これは活版印刷という技術が単独でもたらしたものではありません。活版印刷がすべてを変えたといった技術決定論、つまりパソコンですべてが変わってしまったというような技術決定論が好きな方はわりと多いのですが、そんなことはありません。技術とその使い方、使う考え方が一緒になって変革が起ると私は思っています。明治初期も、新聞雑誌というニュースと情報を多数の人に伝播するというメディアのシステムが、文明開化という国家の下での啓蒙思想とともに取り入れられたことにより大きな変化が起きたのです。それを明示したのが、あまり新聞史でも注目されない、明治四（一八七二）年の新聞紙条例です。この後の明治八（一八七五）年の新聞紙条例は、筆禍事件をたくさん起こすので大変有名ですが、明治四年の新聞紙条例は



有効期間が短かったのであまり注目されませんが、読んでみると面白いんです。その最初は次の二条で始まっています。

一、新聞紙ハ知識ヲ啓開スルヲ以テ目的トスベシ

つまり、新聞は知識を皆さんに広げ、啓蒙することをもって目的とすべきであるということです。

一、人ノ知識ヲ啓開スルハ、頑固偏隘^{へんあい}ノ心ヲ破リ文明開化ノ域ニ導カントスル也。故ニ内外ヲ問ハズ所有ノ事実ヲ記シ、博ヲ約ニシ遠ヲ近フシ、以テ観者ノ聞見ヲ広メ国家為治ノ万一二裨益アラシムヲ要ス。

簡単に言うと、新聞は、人々が知識を啓いて頑固で狭い心を破り、文明開化の域に導こうとするものであるということです。ゆえに国の内外を問わず起こった事実を記して、それからあまねく森羅万象を短く縮め、遠くにあるものを近くにし、見る者の見聞を広めて国家統治

のために利益を与えることを要するということが書かれています。新聞が文明開化のメディアであることを宣言したのですね。この条例にはもつとたくさん簡条があります。その中でもう一つ面白い条例があります。

一、文ハ極メテ平易

ナルヲ主トス、奇字僻文ヲ用フベカラズ。

つまり、新聞の文章はやさしく書きなさい。「奇字僻文」、つまり変わった文字とかわかりにくい文章は用いないほうがいいと書かれています。これは翌年、明治五（一八七二）年に発布される学制とともに、易しい文章で多くの人々に知識を与えて教育する機関として新聞をとらえて奨励する方策をとったことを示しています。この目的とするところは、文字を読めない文盲（当時は「無筆」と言いました）をなくして全国を統一し、文明開化を推進するというのが、明治政府の宣言だったわけです。

ところが、言うは易く行うは難しで、平易な文章による新聞の実現は簡単ではありませんでした。

二、小新聞のふりがなが持つ意味

小新聞は「こしんぶん」と読む明治初期の用語です。最初の活版印刷による日刊紙『横浜毎日新聞』が明治三（一八七〇）年に創刊されます。現在の毎日新聞とは関係ありません。横浜に観光へ行くと、倉庫街の手前に「日刊紙発祥の碑」があります。そこが横浜毎日新聞社があった場所と言われています。これは、神奈川県令（現在の県知事にあたる）の支援を得て、発刊された最初の日刊新聞です。東京でも『東京日日新聞』『日新真事誌』が明治五（一八七二）年に創刊されました。それらは、和紙ではなく洋紙で、しかも活版印刷で、体裁としては西洋の新聞と同じものでした。

しかし、文章が難しかった。漢文訓読を基にした文体で、とても

「平易」とは言い難いものでした。さきほど田中先生が『明六雜誌』（明治七六、一八七三年創刊）が含有する漢字の割合を示されましたが、あれくらい多くの漢字があるわけです。今の大学生には難しくて読めないくらいです。ふりがなも一部を除いてほとんどありません。ですから、知識人でないとなかなか読めません。

これに対して、「全部仮名文字で書いた新聞を出したら読みやすいじゃないの」ということで、前島密（一八三五―一九一九）たちが、平仮名で書いた新聞を試みます。それが明治六（一八七三年）に創刊された『まいにちひらがなしんぶん』です。平仮名でずらずらと書くとかえって読みにくいので、単語ごとにスペースを置いた、分かち書きをしています。「わがくにの……」といったかたちで間をあけているのですが、うまくいきませんでした。最後はタダで配るようなものなのですが、ちっとも売れないし、読んでもくれない状況になりました。問題はどこにあったのか。一つは、漢字を捨てても漢語が排除しきれないという日本語の語彙と文体の問題です。ある程度知識のあることを言おうと思うと、漢語をなかなか排除できないわけです。今日は天氣がいいの「天氣」も、一応漢語です。「てんき」と書いてわからないことはないですが、「この度鉄道が敷かれた」とかを和語に直して表現して、それを読者が読んでもくれるか。なかなか難しい。こういった問題があります。

もう一つは、漢字こそ男が学ぶ正当な本字であり、仮名は本字を崩した女子ども用の文字であるという、「漢字権威主義」と私は呼んでいます。漢字のほうが偉いんだ、漢字を読み書きするほうが賢いんだといった考え方があったことです。そのため、「平仮名の文章か」と

言って、普通の立身出世を夢見る学ある男性たちは、買おうとは露ほども思わなかったんでしょう。今でもそうだと思います。

たとえば、今新聞の発行部数はほとんど減っています。新聞を

読む人は少ないから、ふりがなつきの新聞をだしたらどうですかと記者に言うのと、「とんでもない！」といったことを言いますね。でも、ふりがなつきたったら、留学生でも読めます。海外で日本語を学習している人たちが読むのも、とても楽になると思うんですが、記者たちは「いや〜それは」と言って賛同しません。そんなんじゃ恥ずかしいみたいな部分があるんだと思います。根底には漢字権威主義が、どこか現在にも残っていると思います。

難しい漢字は読めないが、仮名文字だけではだめということになって、一計を案じた人がいました。全部の漢字にふりがなをふってしまいう方法を全面的に採用し、かつ、そのふりがなに話し言葉を取り入れようと考えたのです。話し言葉は、当時「俗談平話」と称していました。「俗談」は俗の談話だし、「平話」は易しい言葉ということでした。口にするような易しい言葉でふりがなをつけ、漢字がある文章でも読ませる文体を用いて発行されたのが、現在まで続く『読売新聞』です。別に読売新聞社の宣伝をしたいわけじゃありませんが、明治七



(一八七四)年一月に創刊されました。

これが非常に売れるんです。あつという間に一万部。当時の新聞の発行部数は、福地桜痴(一八四一―一九〇六)が主筆を務める権威ある『東京日日新聞』でも、五、〇〇〇部とか何千部という程度。当時の日本の人口は約三、五〇〇万人です。今の人口からみると三分の一から四分の一程度ですが、それでも五、〇〇〇部というのは非常に少ないです。それぐらいのミニメディアだったのです。ところが、『読売新聞』は、平仮名つきで出したらあつという間に一万部を超えた。

この小新聞に特徴的なふりがなは、次のようなものです。

「昨日」これは「いつさくじつ」というのが本来の字音の仮名ですが、普通話し言葉で「昨日、お会いしましたね」とは言いませんよね。「昨日会ったよね」と言います。この「おととい」という話し言葉をそのままふりがなに用いています。

また、「行状」と漢字で書いてありますが、「おこない」という話し言葉をそのままふりがなにつけちゃう。

もっと面白いのが、「会計」につけられた「かんぜう」というふりがなです。つまり「おかんじょう」です。今では難しい「勘定」の字を書きますが、「会計」という字に「かんじょう」とつけちゃうんです。もともととは漢語ですが、話し言葉で使っている音をそのまま漢字につける。

「消息」「融通」「無償」「愚弄」「浮雲」。

「浮雲」という小説がありますが、当時の読者は、たぶん「浮雲(あふない)」という意味を思い浮かべて読んでいたと思うんです。

それから、「江湖」「親族」。なかなか味があるふりがなですよ。こういったふりがなは、読み書きができない人々でも口にいる俗語

に漢字を引き当てた訓であり、それによって漢字を読ませるようにしたところが、小新聞の成功を導いたと言えます。仮名文字は読めるが漢字の読みに困難を感じる準識字層、つまり、漢字も平仮名も大體読めるといふ層が完全な識字であるのに対して、「私は漢字はちょっと……だけど平仮名は読めるよ」という層を「準識字層」と呼んでいますが、その準識字層に対し、漢字への志向を排除せずふりがなというはしごをかけたのです。したがって、小新聞においては、むしろふりがなのほうが主体となつて、漢字は従です。たとえば、「苦責る」に「いじめる」とふりがながふつてありますが、ふりがながないと読めません。また「有益こと」には、「ためになること」とふりがながふつてあり、意味がわかります。なかなか遊んでる感じではありますが、こういったふりがななしでは読めない箇所もあります。ふりがなのついた文章のほうが本体で、そこに漢字がふつてあるのを「ふり漢字」と呼んでいます。それは、古典や古語による和訓や字音から自由になつて、新たに生み出された庶民のための訓の試みでした。

実際、この小新聞を街頭で読みあげて新聞を売る呼び売りをやっていた。この今日日は「といった感じで、広場や街角などで読んで、『それ一枚ちょうだい』と売り買いしていました。『呼び売り』と言つて、この販売方法をほとんどの小新聞は採っていました。

これは数年で禁止されます。なぜかという、たとえば、今言う「不倫」などの記事が出たとすると、その当事者の家の前にいつ、『これ今日は○○さんの……』と読みあげられると、周辺の人達はいへん困惑しますよね。そこで当事者がスツと家から出てきて、「それ全部買うからやめて」となるわけです。つまり、半分押し売りみたいな

部分が出てきて止めることになるんですが、数年間は小新聞の呼び売りが行われます。

そういった販売方法ともつながっていて、小新聞のふりがなは、結果として漢字を大衆化する方向へ加勢しました。つまり、漢字が読めないが、ふりがなをつけてあるから読めるようになる。したがって、漢字が使える前段階になるんです。やがて呼び売りが姿を消し、オーラルな表現とのつながりが薄れ、俗語による自由な読みを失って、振り仮名が規範化すると、それは漢字のオトを添えるための手段にすぎなくなり、難しい漢字をはびこらせ庶民の目をくらます魔術に転化する土壌をも生み出したのです。しかし、このふりがなはさきほどのふりがなのような自由さを失って、この漢字にはこのふりがな、これとこれが一對一といった標準化がされていきます。そうすると、単に漢字が記号として、「これはこう読むんだ」という規則が定まり、表現されるだけの手段になって、話し言葉とあまり関係がなくなっていく、漢字を「受け入させる」手段に転化していくわけです。そして、漢字を繁榮させていく。「わからないけど読める」という漢字の需要層を膨大に作り出していくんです。その典型例が、帝国文語の下での漢字權威主義と言文一致です。

三、帝国文語の下での漢字權威主義と言文一致

明治政府による漢文訓読を基にした文語の頂点は、明治二二（一八八九）年発布の大日本帝国憲法と、翌年明治二三（一八九〇）年の教育勅語であろうと思います。幕末まで一部知識人が弄ぶにすぎな

かった漢文訓読体と区別して、明治政府が作り上げた文語を、私は「帝国文語」と呼び区別したいと思います。帝国文語は難解な文章であり、明治の知識人、福地桜痴はこの新文体を「めいこくご鶴文」と称しました。福地は、「全文ノ結構ハ英。使用ノ字ハ漢。而シテ接続ノ文法ハ日本ナレバ、之ヲ名ケテ和漢洋ノ鶴文ナリ」、つまり文章の組み立ては英語、使う語は漢語、つなげている文法は日本語だと述べています。

福地桜痴は『東京日日新聞』の論説をずっと書いてきて、知識人のリーダーだった人ですが、この「鶴文」を作り出してきた張本人の一人であり、実際にこう言って反省しているんです。

新聞はこの「鶴文」をふりがなつきで広め、全国民に読ませるよう普及するメディアとなりました。すなわち、明治二〇（一八八七）年頃から大新聞と小新聞が双方の特徴を取り入れ、中新聞化が進行するとともに、新聞の言語も、大新聞の漢文訓読を基にした文体を基本とするようになりました。たとえば、「是より以後他国民に損害を加ふるの行為続々生ぜば由々しき大問題となるべきや論なし」といった文語体が、明治半ばくらいから大正初めくらいまでの論説や外電などを中心にすえられました。そして、「〜である」「〜なのだ」というやや口語に近い文体が、随筆や娯楽的な記事に用いられました。その両方の文体に全部、ふりがなを振るというスタイルが定着するんです。今の新聞にはふりがなはありませんが、昭和初期まで日本のあらゆる新聞にはふりがながついていました。ですから、新聞にとっても非常にプラスだったわけです。こうした新聞の文体は、立身出世を夢見る青年層を中心に、漢字權威主義を強化する方向へ働きました。

それに対する反動が、日清戦争以降に推進された言文一致運動です。

言文一致運動は、東京山の手言葉を基にした標準語政策と方言撲滅運動と並行して、日本語を国語として統一することを目指しましたが、新聞はここで言文一致運動に添う方向に舵をとります。口語体を全記事へと拡大し、使用する漢字を制限する改革を進めます。明治後半の新聞に比べて、大正末の新聞記事の漢字の数や種類、あるいは難しさは減っているはずです。文章を読んでも、それは明らかです。それはまた、新聞自身の事業の合理化と拡大という利益にかなうものでした。なぜなら、新聞記事を読みやすくするのは、読者層を拡大することにならねえから。

就学率が男女ともに九九パーセントを超えた一九二〇年代に、『大阪朝日』と『大阪毎日』は、それぞれ百万部を超える発行部数を上げるに至りました。このような部数拡大に、言文一致運動に即した文章改革とふりがなが寄与したのは間違いありません。この時期に新聞雑誌はマス・メディアとなりました。しかし、これは直ちにマス・リテラシーの時代の到来を意味しません。都市部での新聞購読率は各種の調査から七割以上に達していたと見られますが、農村部では五割以下だったと推定されます。したがって、新聞の普及率は全体的に六割程度だったと考えられるからです。



四. 放送メディアとふりがなの廃止

新聞中心に語ってきましたが、大正末から昭和初期、一九三〇年前後にメディアと日本語の関係は変化します。まず、大正一四（一九二五）年に東京放送局が開局しラジオ放送が始まります。また、トーキー映画が製作・上映されるようになり、音声のメディアが一般的な広がりを見せました。映画やラジオを通じて、標準語の音声聞くことは、標準語以外を話す人々にとっては重要な影響を与える体験でした。それまで、教室のなかで教師によって主に伝えられていた標準語の音声は、電波によってより生き生きしたかたちで聞くことが可能となり、標準語の広がりを格段に促進しました。

もう一つは、昭和一三（一九三八）年に山本有三（一八八七～一九七四）により提唱され、実行されるようになった新聞雑誌におけるふりがなの廃止です。漢字制限を促進し、国語を浄化して文明国にふさわしい文章にするという目的が掲げられていましたが、実際には、日中戦争開始後の戦時体制下での合理化という側面がありました。一方で、ラジオの普及により、漢字の読めない準識字層が新聞ではなくラジオから情報を得る状況が生じたという背景があると考えられます。少なくともラジオで聞いてもわかるような文章が、情報伝達には望ましかったのは確かです。

ところで、戦後の昭和二八（一九四八）年に占領軍の指導の下で実施された「日本人の読み書き能力調査」では、新聞の語彙を理解し、簡単な新聞の文章が読めるかどうかを試されました。今皆さんがやれば、必ず一〇〇パーセント合格すると思いますが、そのくらい簡単な調査

です。この中で、「新聞をどのくらい読むか」も調査されています。これによれば、「新聞を読まない」人は一五パーセント、「少し読む」が二三パーセント、「読む」と答えた人が六一パーセントでした。これは、さきほどあげた新聞購読率が六割程度だったという推定と大体合致します。また、新聞を理解できたかどうか、調査を突き合わせるとわかります。新聞を全く理解できないという人は六パーセントほど、半分以上しか理解できない人は二割、三分の二程度しか理解できない人が約二割、ほぼ全部理解できるという識字者が五〜六割でした。

この調査の結果はいろいろなかたちで「日本の識字率は高い」という結論として、皆さんが知っている人が多いと思います。というのは、全体の結果として完全文盲、つまり一文字も読めない人は一・七パーセント、平仮名は読めるけど漢字は読めない不完全文盲が二・一パーセントということ、あとの九〇何パーセントの人は漢字が読めるということで、識字率が高いという考えが流布されたんです。

実は、ちゃんと報告書を読むと、やさしい問題ですから完全回答できて不思議はないのですが、満点をとったのは全体の六・二パーセントしかないんです。ということは、九割の人は満点はとれないけど、読めるという「不完全識字」なんです。なので「識字の神話」と言っていますが、果たして日本の識字はどれくらいだったのかと言うと、

それほど高くなかった。その大きな理由は漢字にあると言つてよいと思います。

しかし、ふりがなを廃止した状況にもかかわらず、新聞の普及率は下がっていませんでした。昭和二八（一九五三）年に始まったテレビ放送も、新聞読者を減らしませんでした。さらに、一九六〇年代から一九七〇年代にかけて、新聞の普及率は上昇します。都市部だけでなく農村部もほとんど全世帯が新聞を購読する時代を迎えます。おそらく、みなさんの中には、そういった時代がはつきりと記憶にあるかと思いますが、

一九六〇年代頃に、被差別部落などにおける識字運動が展開したのは、新聞の普及とマス・リテラシーの成立状況を反面から語っていると言えます。

これから、現在、あるいは将来の日本の識字を考える時は、新聞が読めるかというのが目安となるのかどうかということを、私たちは考えていかなければならないと思います。

ご清聴どうもありがとうございました。



パネルディスカッション

パネリスト…清水康行、小林千草、田中牧郎、齋藤希史、土屋礼子

司会…小木曾智信（国立国語研究所）

小木曾 これからパネルセッションを開始します。時間が限られており、短い時間でのパネルとなりますが、最初に会場からたくさんのご質問をいただいておりますので、それについて講師の方からご回答をいただきます。順に、お一人五分程度でお願いします。

清水 まず、「ヨーロッパなどの標準語化の歴史を簡単でいいから教えてほしい」というご質問です。さきほど、一九世紀末から二〇世紀にかけて日本で「国語」「標準語」が問題になると申しました。ヨーロッパでも、ドイツ人の国家としてのドイツとか、イタリア人の国家としてのイタリアができるのは、明治維新とあまり変わらない時期です。イタリアがイタリア王国として統一されたのは一八六一年、ドイツもプロイセンが力を伸ばしてドイツ帝国が成立するのが一八七一年で

す。フランスが普仏戦争で負けて新しい時代にはいるのもその時期です。一九世紀半ば以降、ヨーロッパにおいても、ドイツ語とかイタリア語とかの「〇〇語」が「国民」「国家」と結びついたかたちで意識され、そこで「正書法」やその言語における言語教育、つまり国語教育が展開されていきます。さらに、その



小木曾 智信

国の議会でどんな言葉を使うべきか、使つてはいけなかつたといった議論もされます。日本が国語・標準語議論を展開するほんの少し前の時代に、ヨーロッパでもいわゆる国語の時代にはいつていきます。そんなに古いことはありません。日本の国語改革運動の流れは、そうした欧州での国民国家形成の流れをかなり意識して展開されるという側面があります。私の話の補足にもなるありがたい質問でした。

また、複数の方から、学制と並べて指摘した徴兵令に関して、「徴兵令によって日本中の若い男性が軍隊に集められ、そこである種の軍隊言葉、軍隊教育による共通言語といったものが出てくる。これが言語の共通語化、標準語化にどんな役割を負ったのか、それについての評価をもっとすべきではないか」とい

うご指摘がありました。このことは私も前から考えてはいるのですが、なかなかうまく整理をすることができていませんので、今後の宿題とさせていただきたいと考えております。

ただし、軍隊に徴兵ではいつてくるような人たちは、わりに地方ごとにまとまって「○連隊」を構成しますので、兵卒レベルでは案外、方言的な色彩が強く生き残ったということもあります。

また、日本の軍隊を考えていくとき、陸軍と海軍とで性格が随分違ってきます。これはちよつとずれた答えになりますが、国語問題・国語教育を論ずるとき、国民のどの層を想定するのかという問題があります。明治末年に漢字や仮名遣いについて大きな議論がありました。小学校教育しか受けられない人々をターゲットに、よりやさしい表音式仮名遣いにするか、当時で言うところの国民の何パーセントにもならない中学以上に進学できる人たちに期待して、歴史的な仮名遣いを採用するべきか、という深刻な論争が行われます。そのとき、陸軍の代表で出てくるのが軍医総監の森鷗外（一八六二―一九二二）です。彼は、「陸軍の意見も聞いて私は言うのだ」と脅し



清水 康行

をかけて、激烈な表音式仮名遣い批判をして歴史的仮名遣いを使うべしと主張します。一方、海軍の代表は伊地知彦次郎（一八六〇―一九二二）という日露戦争時の戦艦三笠の艦長で、当時の海軍教育本部の部長です。伊地知は「海軍としては将兵の教育のためには仮名遣いは簡単なほうがいい」と主張し、表音式仮名遣いを進めるよう議論していきます。軍隊の問題を考えていくとき、陸軍がどうだったか、海軍がどうだったかもきちんと見ていくことが重要だと思えます。

ただ、こういうことについて生き証人になってくださる方が、いよいよ最高齢者になりつつありますので、今のうちにやっておか

なければならぬ宿題として受け止めておきたいと思えます。

他にもいくつか質問を受けておりますが、時間になりましたので、申し訳ありませんが、これでお答えとさせていただきます。

小林 まず、「文末の「わ」は江戸時代では男

女ともに用いられていたと見られますが、女性語のマーカーとして機能するまでに、男性の会話文への現れ方はどのように変化したのでしょうか」というご質問がきています。これは、気づきとか言い捨ての文末辞として、男性はそのまま「くだワ」「あつたワ」（ワは下降調）で、現在の関西弁の「ワ」と同じですね。そんな感じで江戸期でも使われていたと考えられます。

「わい」は、男性も女性もけっこう使っています。今も方言に残っているところがあります。たとえば、「くだわい」「ですわい」とか。江戸時代の講義や説教の場で、「くだわい」などは、最後をしめくくる文体として使われています。ただ、女性の場合、私が言いたいのは、「わいな」「わいの」とか、あるときには「わいなあ」「わいのう」とか、すごく艶めかし

い音調をかけると、遊里で使われていたこととなり、そのような表現から再生産させて明治の「新しい女」の自己主張を表す「わ」ができたプロセスを見つめ直すことの重要性です。男性は言い捨てという表現法で「ワ」を使っていますが、女性たちはそうではないかたちで、「です」「ます」にもあうかたちのもの（音調・抑揚）を選び取っていた。幕末から明治二、三十年、もう少しスパンを長く言うと三〇年、六〇年かかったかもしれませんが、選び取っていったことに注目したいと思います。

もう一つは、「江戸語的な「わ」と、明治のお嬢様ことば的な「わ」には、接続する語の違いなど、形式的な差異は見られますか」という質問です。やはり、江戸時代後期～幕末の女性たちが自己主張の手段（表現法）として「わ」を使おうとしたとき、投げ出すのではなく、「です」「ます」につけて冷静で丁寧な説得力をもたせようとしてきました。それが、使いこまれ、広く真似されて、後には、もう女学生の会話の月並みな文末辞となっていく。女学生の会話で「くだわ」「困っちゃったわ」のような言い方がいっぱい出てくると、もう

形式的になっていると考えられます。漱石作品の女学生の会話（たとえば、『吾輩は猫である』の雪江さん）には、その可能性が強い。同じ作品でも女学生なのか、女学校を出てまだ間もないのか、随分年数がたっているのかなど、年代差と文脈のなかで読み解いていくほかないということでございます。

また、「お姉言葉について、最近外国人研究者の本が出ましたが」という前置きがありましたが、私ちよつと不勉強で、こういう本なのかわかりません。あとで検索してみたいと思います。

そのコメントの続きは、「従来研究をされてきた女ことばとどのような関係にあると先生



小林 千草

はお考えでしょうか」という質問になっております。お姉ことばと女ことばは、もちろん歌舞伎が最盛期のころ、女形と言われる人の^{こわね}声やセリフは、わりと遊里のことばと重なる部分がありますが、それを真似るのは江戸時代にもありました。しかし、ここで言うっておられるのは、明治後半以降完成された、いわゆる「ですわ」「だわ」「おもしろいこと」「嘘ですもの」「よくって」のような女ことばを指していると思います。このようなことばは、私がさきほどご説明した自己主張にふさわしい言い方を求めて選び取った、プロセスを経てできあがる、苦心の「わ」ではありません。仕上がってしまった——素敵な女学生や女学生あがりの若い女性たちが使う女ことばです。ちよつと素敵なお嬢様やそのお姉さまたちが使っているのを、男性でそういう姿勢・口調を真似することを職業上選んだ人が使うということですね。

現代、そのことばさえ変わってきております。IKKOさんは「よね」「なんぼ」のような言い方が多いですね。ところが、ちよつと年代が上のおすぎとピー子さんは、「くだわ」「すごい」「すごくおもしろかつ

たわ」というふうに年代差が出ています。おすぎとピー子さんのような方が減っていくと、「わ」そのものもお姉ことばとしてかなり使われる数が落ちていく。一方、「うだよね」とかいうことばはまだまだ生きていくと思います。

コメントの最後に、「お姉ことばが現実の女性の話しことばに変化をもたらすものでしょうか」と書いてありますが、これは考えられません。むしろ新しい、今の女の子たちが、男ことばを少し使いつつ、女性として、自分はこの方がいいなって思ったかたちをつくっていく、それがマスメディアに取り入れられて一つの流れになれば、それを真似る次世代の新たな若いお姉たちが生まれてくるかなと思います。

「わ」の研究にあたって、私がとても気になっていることは、インターネットで見た記事ですが、大島優子さんの言動に対して、大島さんをとてども信奉している宮澤さんというAKB48の一人が言ったことばの表記形態にあります。「大島優子すごくない? こんなふうになんかだったわ。誇りだわ」と、「わ」を使っているのですが、これはweb記事に反

映された会話文としての「わ」ですが、正確には、従来の女ことばの「わ」ではありません。同時に「舌をまいていた」という文脈があるので、「こんなふうになんかだったわ。誇りだわ」のように強めて下降調に発音したものと推測されますが、文字になったとき、そのまま「わ」で、しかも平仮名なんですね。よく注意して見分ける必要があります。ですから、一〇〇年後二〇〇年後の国語史を研究する人は、女性語のマーカーとしての用法なのか、下降調の強調表現としてのものなのか、音声に伴わなければ判定が大変だろうなと思います。この事例をもって、「わ」の研究のしにくさをおわかりいただければと思います。以上です。

田中 まず、コーパスの使い方に関して、「努力」と「つとめる」のような類義語の存在は検索できますか」という質問です。今のコーパスではできません。私は、国語研究所が出している『分類語彙表』（大日本図書）を使いました。たとえば、今日、「優秀」と「すぐれる」など七〜八語の類義語の関係をグラフでお示しました。意味によって語彙を分





田中 牧郎

類してある『分類語彙表』という語彙リストには、「優秀」あるいは「すぐれる」を引くとその類義語が数十語示されています。それをすべて『太陽コーパス』で検索して使いました。そのように、初めから〇〇という語彙の類義語を調べたいと決まっているときは、このようなやり方ができます。また、今日お話しした、解析をして単語に分けて見出し語をつける「Unidic」を使うと、コーパスに使われている単語の五十音順の頻度表をつくることができます。五十音順の単語表ができたなら、『分類語彙表』のリストも電子化されたものが申請すれば手にはいりますので、それを読みと見出し語とで関連づけて一つのデータベース

に入れることで、類義語の頻度表をつくることができます。ただし、『分類語彙表』の単語の単位と「Unidic」の単語の単位がかなり違いますので、今言った機械的なやり方だけだと、かなり採り落としがあります。一応目安として『分類語彙表』を機械的に使えますが、まだそのまま使えるようにはなっていません。見直しをして、手で直していく段階を経る必要があります。国語研究所の事業の目標として、将来的には、『分類語彙表』のような意味分類のデータベースとコーパスとを関連づけて、言語資源が使えるようにすることを目指しておりますが、現段階では今申し上げたような通りです。

次は、「当て字のようなものが和語のふりがなについているものも含まれているか」という質問です。

『太陽コーパス』では、ふりがなも検索することができます。『太陽コーパス』には「ひまわり」という検索ソフトがついていますので、そこで「ふりがなを検索する」という欄に「つとめる」と入力すると、「つとめる」というふりがながついていろいろな表記の語彙が検索できます。以上が「コーパス」の使い方に

ついでのご質問です。

次は、「類義語の関係のうち、「つとめる」「努力する」というペアと、「すぐれる」「優秀」というペアは同様に考えてよいでしょうか」というご質問です。今日お話ししたことは、日本語に漢語が溶け込むという話です。漢語が日本語に溶け込んだ主な理由は、意味の変化によってだと述べました。この意味変化は、漢語だけに起こったわけではなく、対義語、類義語の全体に起こっております。「つとめる」と「努力する」、「すぐれる」と「優秀」も、それから「あらわす」「あらわれる」と「実現する」「表現する」も、すべて同じような流れをとったと考えてよいと思います。

ただ、和語と漢語がほぼ同じ意味なのか、違う使い分けをするのかは、個々の類義語群、あるいは同じ類義語群のなかで、どの語とどの語を比べるかで違います。しかし、基本的に、和語を含む一連の類義語群の変化のなかで、漢語の日本語化、日本語への溶け込みが進んだという点では、同様に考えてよいと思っています。そういったことがコーパスによっていろいろ見つかつたということが伝わったとしたら、私の目的が達せられたと思

います。

最後に、「たとえば」「実現」「表現」「優秀」と表に例示されたものは、いわゆる和製漢語なのでしょいか」というご質問と、それから関連して、「グラフで明治時代から大正時代に減っていく漢語がありました、その漢語の中身について和製漢語・新漢語と、もともと使われていた漢語と、意味変化を起こした漢語の比率がどれくらいか」というご質問です。

まず、個々の漢語が和製漢語かどうかを調べるのは大変です。中国にないということを実証しなければならぬので、これは事実上不可能です。『大漢和辞典』や、中国の主要な作品の索引類、あるいは中国で構築されてい



齋藤 希史

る中国語コーパスを見たうえで、一つひとつ見ていかなければなりません。たとえば、今日扱った中で「努力」は、中国に存在が確認でき

ますが、できないものもあります。しかし、

中国で使われた実績があつても、今日お話ししたような和語との意味関係において日本語で使われ始めたのは、意味用法まで含めれば、今日扱ったもののほとんどすべては日本で使われ始めた漢語、日本的な使われ方をした漢語です。その使われ方のはじまりは、特

に中国語とは関係なかったと言つてよいと思います。もちろん、齋藤先生が扱われたように、最初に英華辞典などを見る、あるいは洋学者、漢学者などが自分が学んできた漢籍の知識をもとに、使つたことはあるかもしれま

せん。しかし、それは中国語で使われていた単語をそのままの意味で持ってきたということではありません。その意味で、広い意味で和製漢語と言つてよいものだと思います。

そして、比率についてはわかりません。一語一語コーパスの用例の分析をして、これはこのタイプ、これはこのタイプであるということを見ていく必要があります。その作業はまだ大変です。タイプ別の比率を知るこ

とは、意味・用法を分析する作業を経たうえでないとできないと思います。

齋藤 いただいた質問に順番にお答えします。

まず、「學術用語から現代でも普通に使われているものについて、他になにかあるか」という質問です。これについて、二つの面からお話します。一つは、今日お話しした「雰囲気」と似たような経緯を持つ語彙に「風化」があります。「経験が風化する」「体験が風化する」と最近よく使われますが、もともと「風化」の「風」も「化」もよい意味でした。文化がそこに行き渡るとか、徳が行き渡るというような儒学的な意味だったのです。これとは別に、中国の本草学、さらには日本の蘭学でも、石灰の分解などと関係して「風化」という語が現れて、これが近代の地質学用語の「風化」という翻訳語と結びつきます。さらにそれが比喩的に用いられて一般にも広まりました。このように科学技術用語が普通の用語としても広がった例がよく見られるのですが、自然観察や地質学系、気象学系の言葉にそのようなものが多いのかなと、なんとなく感じております。

もう一つは、今日の話だと、まるで明治のはじめに大きな変化があったといった印象をお持ちになられた方が多いかと思いますが、じつは、もう一つ波があるようです。たとえば、前に新聞のコラムに書いたことがあるのですが、「観光」「福祉」は今でも普段よく使っていますが、これは明治期の末ごろから大正期にかけて、特に政府や役所側が使うようになりました。さきほど土屋先生が言われた帝国文語の世界、大日本帝国語というかたちで、こういった漢語が多用されて定着していく過程があるようです。これも一つの波として考えることができるのではないかと思います。

また、「外国語のわからない言葉が氾濫しているが、TTPなんかどう捉えたらいいのか」という質問です。

こういう翻訳語の位相について、たとえば、柳父章さんなどは「カセット効果」と表現されたり、鈴木孝夫さんは「ニーズ」という言葉は、英語の「ニーズ」の翻訳じゃなく、「需要」「必要」といった漢語を「ニーズ」に言い換えているだけだといったようなことを言われています。翻訳語についてはこれまでさまざまな議論があるわけですが、そのうえでな

お、何か私が言おうとすれば、近代の日本語は、この語彙は表面的にこうだけど、その裏側に何かついていきますよというか、ある意味で向こう側が見えない翻訳のシステムを内包してしまっているところがあります。それにわれわれは、なんというか、非常に注意深く、敏感であらねばならないのではないか。それは一方で、日本語の語彙の豊かさをもたらししていますが、向こう側が見えない、意味がわからない、なんとなくわからない言葉でも使ってしまう文体を、私たちの言葉が獲得してしまった。あるいは、そういう状態になっていくことについては、功罪両方含めて常に意識していかなければならないのではないかと感じて



土屋 礼子

います。

土屋 「どの講師への質問ですか」という欄で「特になし」とお答えいただいた質問のなかから、私で答えられる範囲で答えさせていただきます。「ラジオ、テレビといった大勢向けのメディアが方言衰退を加速させたと思われるが、いかがですか」

そうだと思います。特にラジオは、標準語を意識してつくられましたし、方言などを放送しないことを前提としておりました。それが崩れたのが、ここ一四、五年ほどだと思います。「あまちゃん」とかいろいろな番組で、今や方言が流行りですが、あれは「もどき方言」と言ったほうがよいでしょう。方言なんだけど、いくらわかるようにつくった方言です。なので、ある種つくられたローカルが今流行りになっています。これは新しい現象で、別の話になるかと思っています。

もう一つ、「漢文や古典は明治以前までは特定階層のものでしたが、明治以降になっても内容や教え方は同じだったのでしょうか。国語教育にどんな影響を与えたのでしょうか」という質問です。

基本的に、漢文や古典は中等以上の教育で行われたもので、初等教育の範囲ではなく、高等教育を受けられる人たちにどのような影響を与えたかということになるかと思

います。漢文や古典と一口に言っても、四書五経から「源氏物語」までいろいろ幅があつて、そのなかのどれを選ぶかはその時代によってかなり差があります。それから、基本的に男性と女性それぞれ別々の学校でしたので、女性向けに選ばれた古典は、たとえば『源氏物語』といった和歌、和文を中心としたものが中心だったし、男性向けには四書五経的なものが中心であつた。また、時代によって、たとえば『源氏物語』は、戦時中は不謹慎であるというか、あまり適正でないというので抑圧されたりします。一通りのことは言えませんが、しかし、漢文の教育について、素読から講読にはいるという手順はどんどん崩れてゆきました。それは学校教育のなかに取り入れるとき、無理があつたんだと思います。日露戦争（一九〇四～〇五）頃までは漢学塾がさかんにあつて、そこで基本的に江戸時代と同じような私たちの教育が引き継がれていたと思います。その後、学校教育に統一されていく段階

において、かなり変わったと、非常に大雑把ですけれども言えるかと思います。

もう一つ、「標準語の確立過程でも各地の方言や、植民地地域の言葉を維持していこう、守ろうという研究や政策はなかったのでしょうか」という質問。これには答えづらいのですが……。たとえば、アイヌ語の研究ですが、いろいろな方言や植民地の言葉の研究を言語学者が行ってきました。それはある意味では国語政策と裏表になっていましたので、それを守ろうという政策的なものがあつたかという、それは違うと言わざるをえません。

ただし、方言を何らかのかたちで守ろうというような運動として私が思い浮かべているのは、識字の関係から言うと、綴り方教育、綴り方の運動ですね。あれは言文一致運動が始まって、しばらくたった時期から始まっています。生活のなかでの方言も含めて、その生活の言葉で書こうということを子どもたちに教育するというやり方でした。これは標準語からはずれた表現でも書いていこうという部分があつたのではないかと思っています。以上です。

小木曾 ありがとうございます。残りが

一〇分足らずですので、これからパネルディスカッションするには明らかに時間が不足していますが、質問の補足、あるいは他の方への質問で補ったほうがよいことがございましたらお願いしたいと思います。清水先生お願いします。

清水 国語研究所の方にお答えいただいたほうがよいような質問が私のところにきています。「国語改良志向の流れが昭和二三（一九四八）年の国語研究所設立につながっているのか」ということと、現代における、特にローマ字入力における正書法の不在、不確立を嘆いていらつしやる質問があります。国語改革、あるいはその正書法とか仮名遣いと国語研究所とのかわりを、田中さんなり、小木曾さんなりから簡単にご説明いただければと思います。

田中 それでは、私が国語研究所の職員、研究員として考えていることを簡単に申し上げます。今日の先生方のご講演にあつた通り、確かに文部省、文化庁と続いてきた国語政策の流れは戦前から始まっています。特に清水先生のご講演にあつた通り、その直接的な流

れは上田萬年（一八六七～一九三七）や、「国語調査委員会」（一九〇二）から始まっております。そして、上田以前にもさまざまな論者たちが、近代の日本語をどうすべきかを論じていました。たとえば、今日紹介した『明六雑誌』などにも洋学者がさまざまな立場で言語論を展開しております。体制が整って、国立国語研究所が設立されたのは昭和三年でしたが、国の言語研究機関をつくる、つくりたいという願いは戦前から続いてきて、それが昭和三年に実現したのだと思います。

そして、現在も国立の国語研究所は日本語をどうすべきかを考える使命は引き続き持っています。ご質問のように、正書法が確立していないという問題もあります。しかし、これまでの国語政策では、文字表記に関する施策は、仮名遣い、当用漢字、常用漢字とかな

りやられてきており、一定の成果はあがっていると思います。しかしながら、今日小林先生が扱ってくださった話しことばでのことば遣いや、私が扱ったような語彙、そして齋藤先生が質問に答えてくださった新しい外来語の問題は、従来の国語政策ではとりあげられませんでした。とりあげてこれなかった文字表記以外の問題も、現代の言語問題としてより大きなものになっているのではないかと思います。そういったことは、引き続き、文字表記の問題だけでなく国語研究所で基礎的な研究をして、何らかの提案を世の中にしていくべきだと思っております。

小木曾 他に、補足すべき点などありましたら、いかがでしょうか。

では、時間が迫ってまいりました。今日の

フォーラムは「近代の日本語はこうしてできた」というテーマでした。この問題に対してまったく異なる五つの側面から光が当てられたと思います。それぞれが、「こうやってできた」というご回答だったと思いますが、そのすべてのご発表が今のわれわれのことばに、かなり直結していることがわかれて、大変興味深く思ったところでございます。本当は、この現代語とかかわる問題についてもいろいろな議論ができるとよかったところですが、時間がきてしまいましたので、今日はここまでとさせていただきます。講師の先生方、ありがとうございました。

以上でパネルディスカッションを終了いたします。

本日は長い時間どうもありがとうございました。第七回NINJALフォーラム「近代の日本語はこうしてできた」をお楽しみいただけましたでしょうか。

現在、私たちは当たり前のように標準語を使ったり、話しことばを使ったり、書きことばで文章を書いたりしています。それがたった二〇年ほど前、非常に大きな流れのなかで模索しながらできあがってきたことを、感じた次第です。

本日のフォーラムの内容は、文字化して冊子にすると同時に国立国語研究所のホームページにアップする予定です。また、これまで六回行いましたフォーラムの内容も、国立国語研究所のホームページでみることができますので、よろしかったらぜひご覧ください。

次回の宣伝ですが、本日のフォーラムでも、近代語にとって漢字、漢語がとてもし大きな意味、役割を持っているという話がございましたが、次回は「世界の漢字教育」というテーマで、九月二二日（日）にこの場所、一橋講堂で開催する予定です。日本語を学ぶ世界の方々が漢字をどうとらえているか、漢字教育はどうあるべきかが主なテーマとなります。次回もぜひお越しください。

本日は足元のお悪い中、ありがとうございました。今後ともよろしく願っています。



NINJAL フォーラムシリーズ 5
国立国語研究所 第7回 NINJAL フォーラム

近代の日本語はこうしてできた

2014 (平成26) 年 7 月 31 日

発 行：人間文化研究機構 国立国語研究所
〒190-8561 東京都立川市緑町10-2
TEL 042-540-4300 FAX 042-540-4333
<http://www.ninjal.ac.jp>

制 作：株式会社クバプロ



国立国語研究所